

キリストの あがな 贖いと十字架



驚くべき神のご計画

ADVENTIST MISSION

www.AdventistMission.org



モンゴルのアドベンチスト教会は、長年の弾圧を経て、わずか15年前に再組織されました。今日信徒の多くは35歳以下です。

これらの若い信徒の250人ほどは、首都ウランバートルの国立大学に学んでいて、ほとんどは公立の学生寮に住んでいます。世俗的な環境での生活と勉学は、彼らの信仰の維持を困難にしています。このため大学生活を続けるうちに、多くの学生たちの靈性がしだいに弱ってしまうのです。

アドベンチスト教会はこれを変えたいと思います。アドベンチストの学生たちのための寮は、彼らの信仰を破壊する代わりに強化する環境——生活し勉学するために安全な環境を提供します。

今期の13回献金の一部は、このプロジェクトを援助し、モンゴルの将来の教会指導者たちを支えます。教会が青年に関心を持つ計画に協力できることを嬉しく思います。

13回特別献金日 12月27日

今期の13回献金の一部は北アジア太平洋支部の教会のために用いられます。

安息日学校の目標

- 学ぼう 主の愛を日々味わうために
- 祈ろう 主の愛は真実だから
- 温めよう 主の愛を兄弟姉妹に尽くすため
- 伝えよう 主の愛を世に満たすため
- 献げよう 主の愛が求めるままに
- 集まろう 主の愛への私の証しは定刻出席

※上記の目標をもとに、各教会の必要に合う安息日学校の目標を立ててください。

序言 あがな (贖いの教理)

病院に連れて来られたときには、その年老いた牛飼いは視力を失い、ほとんど死ひんに瀕していました。そこにいる間、孫娘が毎日やって来て、本を読んでくれました。老人も孫の優しい声に生きがいを感じていました。

彼女はある日、部屋の片隅に一冊の聖書があるのに気づきました。友だちが置いていったものでした。彼女は何げなく『ヨハネの手紙1』の1章を開いて、読み始めました。老人は注意深く聞いていましたが、「御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます」という言葉を聞いたとき、急に彼女をさえぎりました。

「本当に、そのように書いてあるのかい」

「はい、おじいさん。そのように書いてあります」

「もういちど、読んでくれるかい」

「御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます」

少し沈黙が続いてから、老人はまた言いました。

「本当に、その本にそのように書いてあるのだね」

「はい、おじいさん。本当です」

「どうか、私の手をとって、指をその言葉の上に置いて、もういちど読んでおくれ」

彼女が言われた通りにすると、盲目の目から涙があふれ、もつれた口で、しかし心から安心した様子で、老人は言いました。

「いとしい娘よ、……もしたれかから私がどのようにして死んだか尋ねられたなら、私は……清められて死んだと……伝えておくれ」

この物語が教えているのは、^{あがな}贖いの教理が抽象的な救いの理論ではないということです。それはむしろ、墮落した、罪深い人間の生活における神の救いの力です。

贖いとは何でしょうか。一般的には、贖いとは神との交わりを妨げるものを取り除くことです。ある意味で、贖いは和解と同じ意味ですが、それはまた償いという思想を含みます。この償いという奇抜な言葉は神と私たちとの間にある障害物を取り除くという思想を描写するものです。贖いの教理は唯一の償い的手段としてのキリストの犠牲を強調するものです。このキリストの犠牲によって私たちと神とのあいだの障害物、すなわち罪が取り除かれ、私たちは神と和解するのです。

事実、贖いはほかのすべての教理の中心にある聖書の教理です。それはキリストの生涯と復活、昇天、執り成し、再臨に中心を置いています。それは罪の存在、救いに対する人間の根本的、決定的必要、人間を救う愛の神を前提条件としています。

神についての聖書の教理を正しく理解することもまた、贖いを理解する上で欠かせません。私たちがイエス・キリストを通して神との一致・交わりに回復されるのを可能としたのは神の愛でした。私たちは決して、キリストの死が神に私たちを愛するように仕向ける上で必要であったという印象を与えてはなりません。神がキリストを私たちに代わって死ぬために遣わされたのは、神がすでに私たちを愛しておられたからです。贖いについての聖書の教理は罪深く反逆的な人間に対する神の愛に根ざしています。

贖いの恵みの豊かさにあずかるのは、聖霊の感化を受けた後で、赦しと回復の唯一の手段としてのキリストの救いを受け入れる人たちだけです。彼らの心はこの無限の犠牲を可能とさせていただいた神とキリストに対する愛と感謝で満たされます。

今期、キリストの身代わりの犠牲の意味について学ぶとき、私たちのために驚くべき犠牲を払ってくださったお方に心から献身するようになることが、著者の心からの願いです。私たちが生きるときにも死ぬときにも、あの年老いた牛飼いのように、平安に満たされるためです。

〈著者〉アンヘル・M・ロドリゲス
(世界総会聖書研究所所長)

目次 (キリストの贖いと十字架)

序言	1
第1課	神の性質——贖いの基礎	10月4日 ... 4
第2課	宇宙の危機——神の秩序の崩壊	10月11日 ... 11
第3課	墮落	10月18日 ... 18
第4課	贖いと神の主導	10月25日 ... 25
第5課	布告された贖い	11月1日 ... 32
第6課	象徴に見る贖い (1)	11月8日 ... 39
第7課	象徴に見る贖い (2)	11月15日 ... 46
第8課	女から生まれる——贖いと受肉	11月22日 ... 53
第9課	救いの比喻	11月29日 ... 60
第10課	十字架における贖い	12月6日 ... 67
第11課	キリストによる贖いの犠牲の恵み	12月13日 ... 74
第12課	キリストに結ばれる	12月20日 ... 81
第13課	贖いと宇宙の調和	12月27日 ... 88

今期のテキストの翻訳は教団翻訳部、リライトは本郷武彦牧師、毎週金曜日の特別寄稿メッセージは牧師有志、校閲・校正は出版編集部、最終校閲を安息日学校協力牧師（池増益男、堀内一誠、明智信作、安居益也）並びに教団安息日学校部が担当しました。口語訳聖書、新共同訳聖書からの聖句引用に関しては、日本聖書協会の承認を受けております。引用されている聖句は新共同訳を基本としています。

第1課

10月4日



神の性質——^{あがな}贖いの基礎

● 暗唱聖句 ●

「わたしは初めから既に、先のことを告げ まだ成らないことを、既に昔から約束しておいた。わたしの計画は必ず成り わたしは望むことをすべて実行する」 (イザヤ書 46 : 10、新共同訳)

「わたしは終りの事を初めから告げ、まだなされない事を昔から告げて言う、『わたしの計りごとは必ず成り、わが目的をことごとくなし遂げる』と」 (イザヤ書 46 : 10、口語訳)

今週の聖句

詩編 139 : 1 ~ 4、イザヤ書 46 : 10、ヨハネ 1 : 4、
ローマ 5 : 8、8 : 37 ~ 39、ヨハネ I : 5 : 11、12

安息日午後

今週のテーマ

9月27日

神について、つまり神に関する事柄、神の聖なる性質、神の力については、私たちに理解できない神秘が数多くあります。しかし、私たちにもある程度理解できる神についての側面が一つあります。それは神の愛、つまり御子の贖いの業を通して私たちに啓示された愛です。その業は個人的に私たちに働きかける業、神御自身の性質と存在の結果として現れる業です。

今週から救いの教理について学びますが、そのためにはまず、私たちの救いの原動力となったのが神の偉大さと愛であることを認める必要があります。神が御子において私たちのための業を成し遂げてくださったのは、御自分以外の者に強いられたためではありません。神がこの墮落した世界に御自分の愛と恵みを注いでくださったのは神の性質そのもののゆえでした。

日曜日

永遠の神

9月28日

問1 「初めに、神は……創造された」（創1：1）という聖句は、神の性質についてどんなことを暗示していますか。質問に答える前に、創世記21：33と詩編90：2も読んでください。

永遠という概念は私たち人間には理解しがたいものです。人間は（少なくともこの世にあっては）有限な被造物であって、いつかは死にます。事実、私たちの関係するすべてのものは一時的であって、今日は存在しても、いつかは消滅します。この世のほとんどすべてのものには、始まりと終わりがあります。しかし、有限なものの考え方に慣れてしまった人間にとって、神には始まりも終わりもないという思想を理解することは容易ではありません。

問2 詩編102：26～28（口語訳102：25～27）を読んでください。これらの聖句は新約聖書ではだれに適用されていますか（ヘブ1：10～12参照）。それらは詩編90：2と共に、神の永遠性についてどんなことを教えていますか。

神は永遠であるゆえに、神はすべての被造物以前に存在されたゆえに、神は自存されるお方であると言わねばなりません。しかし、被造物はそうではありません。神は存在するためには何ひとつ必要とされませんが、私たちはみな生きるためには空気や水、食物を必要とします（創1：29）。永遠にわたって、神が万物を創造される以前には、神のほかには何ひとつありませんでした。したがって、神は何ものにも依存することなく、自ら存在されたのです。神は本質的に命です。本質的に命であるお方、永遠に自存されるお方だけが、悔い改めた罪人に命を回復することがおできになります。創造された命は、今も、また永遠に、すべて大いなる命の与え主なる神から来ます（ヨハ1：4、Iヨハ5：11、12参照）。私たちはすべてを神に依存しています。

◆ あなたが地上にあってどの程度、命を神に依存しているか考えてみてください。永遠の命についてはどうでしょうか。このことはどれほどあなたを謙虚にしてくれますか。尊大な心が神の目に嫌悪されるのはなぜですか。

神についての神秘は私たちの完全な理解を超えたところにあります。神は私たちの力で究めることのできる対象ではありません（ヨブ 11：7）。聖書は神の存在について組織的、哲学的な説明を与えてはいません。聖書が提示している神は、御自分の行為を通して、また私たちとの関係を通して自らを啓示される神です。私たちが神を知るのは、神が御自身について語られることによってです。それ以外には、神を知る方法はほとんどありません。

聖書は、神が本質的に愛であると告げています。すなわち、神の存在の本質は自己犠牲であって、それは他者の幸福への関心において現されます。

問3 次の聖句は神の品性と性質についてどんなことを告げていますか。
詩編 118：1～4、ロマ 5：8、8：37～39、Iヨハ4：8、9、16

「神は愛です」という言葉は神の本質を明らかにしてくれます。(1)「神は愛です」とは、神の本質を探究すると、それが本質的に愛であることが明らかになることを意味します。神の性質についてのこの理解は贖いの教理においてきわめて重要です。(2)「神は愛です」とは、神が関係的なお方であることを意味します。神は本質的に御自分の被造物との交わりをお喜びになります。神が御自分の愛を啓示されるのはまさにこの個人的な相互関係においてです。神が私たちが愛するか否かを知ろうと思うなら、自分の思いや感情を調べるのではなく、神が罪深い私たちがどのように扱われたかを知ることです。(3)「神は愛です」とは、神が御自分以外の何かのゆえに私たちが愛されるのでないことを意味します。神は本質的に愛であるゆえに、私たちが神に受け入れられるために自らを愛される者とする努力は不必要、いや不可能です。言うまでもなく、救いの計画以上に私たちに對する神の愛を啓示するものは何もありません。事実、私たちが罪に陥った瞬間に、キリストは私たちの仲保者、贖い主、救い主とされました。これは墮落した人類に対する神の愛の最高の現れです。

◆ 「神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです」（Iヨハ4：11）。あなたはどんな実際的な方法によって人々に対する愛を表すことができますか。あなたの生活の中でこの愛を表すのを妨げているものは何ですか。

火曜日

創造主なる神

9月30日

「知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民 主に養われる羊の群れ」(詩編 100 : 3)。

聖書ははっきりと述べています。神は創造主です。この基本的な真理がなければ、聖書の教えは無意味です。一方、神が創造主であるということは、神が被造物とは区別されること、神が創造された秩序の一部でないことを意味します。神が創造主であるということは、神以前、あるいは神の創造行為以前には何もなかったことを意味します(ロマ 4 : 17、ヘブ 11 : 3)。神が創造主であるということは、万物が神に属し、その生存を神の力と慈悲に依存していることを意味します(詩編 24 : 1、2、104 : 10 ~ 14)。神が創造主であるということは、被造物がその創造主の栄光と力を啓示することを意味します(詩編 19 : 2 ~ 4——口語訳 19 : 1 ~ 3、ロマ 1 : 20)。

問4 創造主は罪によって損なわれた世界に何と約束しておられますか。
イザ 65 : 17、黙 21 : 1

聖書ははっきりと、神が御子の力によって万物を創造し、支えておられると述べています(ヨハ 1 : 1 ~ 3、ヘブ 1 : 2、3)。贖いはこの被造世界に生じた罪の問題に対する神の解決法です。神は、私たちが罪と反逆の最終的な結果である永遠の滅びを刈り取るにまかせる代わりに、救いの計画を立てられました。

問5 パウロはキリストと結ばれる人たちをどのように描写していますか。II コリ 5 : 17

神が宇宙の創造において現された力は、神が墮落した人間を御自分のかたちに再創造されるときに用いられるのと同じ力です。神は御言葉の力によって万物を創造されました(詩編 33 : 6)。神が私たちを再創造されるのも(ヨハ 1 : 1、12、13、II コリ 4:16)、キリストにおいて人となられた御言葉の力によってです。

◆ あなたは、自分が苦勞して作ったものにどれほど愛着を感じていますか。これは私たちと創造主との関係を理解する上でどんな助けになりますか。

問6 イザヤ書 40：25、57：15 を読んでください。これらの聖句は神の性質についてどんなことを教えていますか。

神が聖であることは、単に神の特性の一つであるばかりでなく、愛と同様、神が本質的にどのようなお方であることを啓示するものです。神が聖であることには、少なくとも二つの基本的な思想が関係しています。

第一に、それは神を独特なお方として描いています。「聖なる」という言葉はふつう、他を入れることのできない、独特な務めと見なされる事柄を表します。しかし、「聖なる」が神に適用されたときには、それは神が独特で、比類のないお方である事実を強調します。この宇宙には、私たちの荘厳で、威厳のある神に並ぶ者はいません（イザ 46：5、9 参照）。神だけが私たちの礼拝を受けるにふさわしいお方です。

第二に、神が聖であることは、神が遠くにおいて、私たちに近づくことも、私たちが交わることもおできにならないことを意味するものではありません。神の聖と愛は不可分の関係にあります。神が聖であることは、神が悔い改めた人々、心のへりくだった人々と共に喜んでお住みになることのうちに啓示されます。聖なるお方は彼らに近づき、彼らのうちにお住みになることによって、御自分の被造物が御自分の聖にあずかるものとならせてくださいます。

問7 次の聖句にどんな約束が与えられていますか。Ⅱ コリ 5：21

神の聖は罪を大目に見るものではなく、むしろ積極的に罪に対抗します（イザ 5：24、ホセ 9：15、ロマ 1：18）。「あなたの目は悪を見るにはあまりに清い」（ハバ 1：13）。神がもともと罪を嫌悪されるお方であるゆえに、仲保者の役割が必要となりました。神は、罪人が清められて、もういちど神との交わりに入る道を備えられました。それは、贖いと聖が神秘的に結合しているキリストによって可能となりました。聖なるお方は、贖いの死の力を通して私たちが清めるために、この罪と不浄に満ちた地上に赤子としてお生まれになりました（ルカ 1：35）。「この御心に基づいて、ただ一度イエス・キリストの体が献げられたことにより、わたしたちは聖なる者とされたのです」（ヘブ 10：10）。

木曜日

全知の神

10月2日

問8 次の聖句は神の知識について何と教えていますか。詩編 139:1～4、15、16、イザ 46:10、マタ 10:30

神は全知です。「神は……すべてをご存じだからです」(1ヨハ 3:20)。神に隠されているものは何ひとつありません。「神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです」(ヘブ 4:13)。神の被造物の全領域は神の臨在で満ちていて、神はそのすべての次元をご存じです(詩編 139:7～10)。私たちについての神の知識は完全に完璧です。神だけが純粋な客観性を持っておられます。神だけがすべての可能な視点からすべてのものを知っておられるからです。

主は現在のことを知っておられるだけではなく、将来において起こることをも完全に知っておられます(イザ 46:10、マタ 26:34、74、75)。過去や現在と同じく、将来も主から隠されてはいません。

問9 ペトロ I の 1:19、20 は、神が罪の発生をあらかじめ知っておられたことについて何と述べていますか。

神が全知であることは贖いの教理にとって非常に重要な意味を持ちます。神はすべてを知っておられるゆえに、神にとって罪は不意に生じたものではありませんでした。御自分の被造物を完全に知っておられる神は、御自分のケルビムの一人が墮落することを事前に知り、罪が人間のうちに発生する前から、罪の問題を解決する計画を立てておられました。「罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました」(ロマ 5:20)。この意味で、人間を救う神の決定は永遠に隠されていて、キリストにおいて啓示されたのでした。それは、「世々にわたって隠されていた、秘められた計画」(ロマ 16:25)であり、「すべてのものをお造りになった神の内に世の初めから隠されていた秘められた計画」(エフェ 3:9)です。神は万物を創造する前から罪の発生を予見し、罪から逃れる代わりに、それを打ち破る決定を下されました。神の視点からすると、キリストは、「天地創造の時から、屠^{ほふ}られた小羊」(黙 13:8)です。

◆ 神はあなたのことをすべて知っておられるのに、あなたを愛しておられます。あなたの人々に対する態度はどのようであればなりませんか。

神と贖い ^{あがな} 「大いなる贖いの計画について熟考するときのみ、私たちは神の品性を正しく理解することができる。創造の働きは神の愛の現れであった。しかし、有罪の、墮落した人類を救うための神の賜物のみが、神の愛情と同情の無限の深みを明らかにする」（『教会へのあかし』第5巻739ページ）。

救しと正義 ^{ゆる} 「われわれは、十字架の光に照らして神のご品性を学ぶときに、あわれみと慈愛とゆるしが公平と正義に入り混じっていることを見る。神の玉座の真ん中に、人間を神と和解させるために受けられた苦難のしるしを、その手と足とわきに持つておられるかたを見るのである。無限の父なる神が、近づくことのできない光の中に住んでおられ、それでもなおみ子の功績によって、われわれを受け入れて下さるのを見るのである。悲惨と絶望しかもたらさないように見えた報復の雲は、十字架の光に照らしてみると、次のような神の筆のあとをあらわすのである。生きよ、罪人よ、生きよ。あなたがた、悔い改めて信じる人々よ、生きよ。わたしは、あがないの価を払った」（『患難から栄光へ』下巻13ページ）。

「私とキリストの贖罪」^{しよくざい}

私は母の書いた本を読んだ時、私の両親の若き日の命がそれぞれ守られ、出会いと結婚が不思議に調えられ、私の誕生があったことを知りました。私の誕生や人生での数々の不思議な体験が単なる偶然ではなく、神の愛による摂理と恵みであったことを悟り、本当に有難いことでした。

父・御子・聖霊なる神は真の愛の中に存在しておられます。神はその愛を味わわせるために宇宙と被造物を創造されたのではないのでしょうか。人類は罪に陥り、悲惨・苦難・死の運命を負いましたが、神は人類を罪から贖うためにこの世に御子を遣わされました。神の御子が人となられ、罪なき人生を歩まれ、十字架上で贖いを完成して下さったことで神の愛が宇宙に示されました。御子の贖罪がどれほど困難で苦悩に満ちたものだったか、被造物は理解できません。しかし人類は神が自分達を愛して下さったことを知ることができます。更に、神の愛に感謝し、神に栄光を帰し、キリストにあつて人々を愛し、信仰を持って人生を全うすることができますのです。

秋田・湯沢・横手・秋田南教会牧師 新名幹二

— 寄稿メッセージ —



宇宙の危機——神の秩序の崩壊

●暗唱聖句●

「御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています」
(コロサイ 1:17、新共同訳)

「彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあつて成り立っている」
(コロサイ 1:17、口語訳)

今週の聖句

創世記 3:4、5、エゼキエル書 28:14～17、
イザヤ書 14:13、14、ヨブ記 1:8～11、
黙示録 12:7～9

安息日午後

今週のテーマ

10月4日

どれほど豊かに与えられていたとしても、どれほど高い地位にあつたとしても、ルシファーにとっては十分ではありませんでした。彼はさらに多くのものを望みました。こうして、「不法の秘密の力」(IIテサ 2:7) が始まりました。これが神の宇宙における罪の起源でした。

この完全な存在者のうちに悪が生じたことは神秘です。なぜなら、それには理由がなかったからです。もしその理由を説明することができるなら、それを正当化することができます。それは、ルシファーが特別な感情と願望を心に抱くという最初の小さな一歩から始まりました。ルシファーのうちの対立する感情が、神から与えられた自由を誤用することと結びついた結果、宇宙規模の戦い、神に対する徹底的な反逆となつて、数えきれない被造物に苦しみと死をもたらしました。今日、私たちはみな、この戦いの結果に苦しんでいます。

しかし、失望するには及びません。これからの研究で学ぶように、キリストはこの宇宙の危機をもたらした論争を公平に、正しく解決するために来られたのです。

問1 エゼキエル書 28：14～17 を読んでください。この聖句は罪の起源について何と述べていますか。墮落前のルシファーはどんな存在でしたか。

永遠である神とは異なり、悪と罪には始まりがありました。言い換えるなら、悪と罪の存在しなかった時がありました。神は愛にして聖であるゆえに、また神の創造されたものはすべて善であるゆえに、罪は神のうちに始まったものではありません。エゼキエルは、罪が不可解なことに、善なる者として創造された被造物のうちに始まったと述べています。「お前が創造された日からお前の歩みは無垢であったが ついに不正がお前の中に見いだされるようになった」（エゼ 28：15）。「無垢」（ヘブライ語で“ターミム”、「完全」）という言葉は、この被造物が創造主の手から出てきた時には完全であったことを示しています。

罪が高位の存在者であるケルブのうちに始まったことにも注目してください。ケルビムはほかの天使たちよりも神に近い存在でした。二人のケルビムがエデンの園の入り口を守るために置かれました（創 3：24）。純金で作られた一对のケルビムが契約の箱の上に置かれました（出 25：18～20）。箱の上のこのケルビムの位置は、神の住まいの中で神の臨在の光の中に立つ、このケルブの高い地位を例示しています（『各時代の希望』下巻 283 ページ）。このように、罪は神の御座のそば近くにいた一人の天使のうちに始まりました。「神の聖なる山」という言葉は、神が御自分の被造物のうちに住まわれる天の神殿、天の政府の中心を表しています。

このケルブ、ルシファーの墮落は、神から与えられた美と知恵の賜物を誤用するという利己心に根ざしていました。不可解にも、彼が自分の感情と思いを理性の上に置いたために、その完全さが失われました。「栄華のゆえに知恵を墮落させた」（エゼ 28：17）。神の秩序に留まって、他者を祝福するために自らの賜物を用いる代わりに、彼は自分が美と光輝、知恵においてほかのだれよりもすぐれていると考えました。「徐々に、サタンは自己高揚の欲望をほしいままにすることになった。こうして、神の確立された秩序が崩壊した」（エレン・G・ホワイト『私を生かす信仰』66 ページ）。

◆ 自分の持っているもので満足せず、さらに多くのものを望むことがありませんか。それはだれの品性を現すことですか。それがキリストの品性に反することであるのはなぜですか。

月曜日

神に対する攻撃

10月6日

問2 イザヤは反逆したケルブ [ルシファー] の真の意図をどのように描写していますか。彼の真の動機は何でしたか。イザ 14 : 13、14

このケルブのうちの奇妙で利己的な感情と思いが彼のより高い能力と理性よりも優勢になるにつれて、彼はますます大胆になりました。彼は神からゆだねられた自由を曲解し、誤用し、ついには神御自身の権威を奪いたいと望むまでになりました。エゼキエル書 28 : 15 には、創造主の御手から出たときの善良な被造物としての状態と、その後、彼のうちに生じた変化とが対照的に描かれています。彼は初めのうちは「無垢」、完全、無欠でしたが、彼のうちに「不正」、「悪」（新国際訳）が見いだされるようになったと述べています。この言葉は旧約聖書の中で、二心、不浄な野望、うそ、背信を意味するものです。

「お前の心は……高慢 [ヘブライ語で“ガーバー”、「高くなる」、「高められる」となり]（エゼ 28 : 17）とエゼキエルは言っていますが、それは自分を実際以上に考えること、または自分を他人より優れたものと見なすことです。また神の御心を無視し（詩編 10 : 4、エレ 13 : 15）、神御自身に反対する（エゼ 28 : 2）態度につながります。この墮落したケルブが神に背き、神を攻撃し、うそを語り、欺いたことは想像に難くありません。

問3 蛇はどのようにしてエバに神を誤解させましたか。創 3 : 4、5

エバを神に背かせるために、サタンは神の品性を攻撃しようとしていました。神はもともと利己的な存在であり、知的存在者たちの発達を制限し、死をもって脅して、彼らに強制的に服従を強いているのだと言うのです。神は愛の神ではなく、見せかけの愛の裏に真の性質を隠しているのだ、と。サタンは自分自身の偽りに満ちた性質と墮落した心の真の意図とを神に投影していました。神と神の愛の性質に対する天でのサタンの攻撃は今、この地上に舞台を移そうとしていました。

「もしルシファーが、ほんとうにいと高き神のようになろうと望んだのだったら、彼は決して天における自分の定められた地位を捨てなかつたであろう。なぜなら、いと高き神の精神は、無我の奉仕のうちにあらわされるからである。ルシファーは、神のご品性を望んだのではなくて、神の権力を望んだのであった」（『各時代の希望』中巻 211、212 ページ）。

律法は立法者の品性と意思の現れです。詩編作者は言います。「わたしの神よ、御旨を行うことをわたしは望み あなたの教を胸に刻み」（詩編 40：9）〔「教え」は英語聖書では「律法」となっている〕。ここで、神の御旨は内面化され、詩編作者の品性の一部となっています。言い換えるなら、神の品性は律法に現された神の御旨に従うことによって自分のものとなっています。

問4 次の聖句は神の愛と神の律法の関係を理解する上でどんな助けになりますか。マタ 22：37～40、ヨハ 3：16、14：15、21、Iヨハ 5：3

ヨハネは、「悪魔は初めから罪を犯しているからです」（Iヨハ 3：8）と言っていますが、これは、サタンが天で神の愛の御旨に背いたという意味です。愛による服従と対照的なのが「不法」です（Iヨハ 3：4 参照）。「不法」（“アノミア”）という言葉は反逆的な人間の心にある根深い態度をさします。それは神の律法や、それが意味する神の品性に代わるものとしての混沌・無秩序こんとんを意味します。宇宙の戦いは神と神の本質に対する戦いです。パウロは終わりの時に現れる反キリストを「不法の者」（IIテサ 2：3）とし、罪の現象を「不法 [アノミア] の秘密の力」（7 節）として描いています。

問5 アダムに対する神の命令とエバに対するサタンの言葉について復習してください（創 2：17、3：4、5）。どんなことが起こっていますか。

創世記 2：17 は、アダムとエバに対する神の愛の、また彼らと永遠に交わりたいという神の強い願望の明らかな表現でした。彼らが死を経験することは明らかに神の望まれるところではありませんでした。そうでなければ、彼らに死の可能性について警告されるはずがありません。自由な存在者として創造されたアダムとエバは、彼らが自由意志にもとづいて創造主との永遠の交わりを望んでいることを実地に示さねばなりませんでした。そして神の命令に従うことによって、その神との永遠の交わりの選択を示すのでした。サタンが攻撃し、妨害するのは、このはっきりと現された神の御旨です。代わりに、彼は神からの全面的な「独立」を提案します。神の命令から自由になること、だれに対しても責任を負わないで自由に振る舞うこと——これが天における彼の基本的な目的でした。

水曜日

罪は神の支配に対する反逆

10月8日

問6 パウロはキリストの宇宙的な役割をどのように描写していますか。
コロ1：16、17

被造物を調和に満ちた一致に統合するものは自然界の法則（それも重要ですが）ではなく、キリストにおける愛の神の力です。愛はクリスチャンを一つに結びつけるきずなであるばかりでなく（コロ3：14）、宇宙を統一するきずなでもあります。それは非人格的な力ではなく、神御自身の本質そのものです。神に対する攻撃は、神が宇宙を支配する方法に対する攻撃であり、したがって、それは被造物についての神の秩序をくつがえすことです。

問7 ヨブ記1：8～11を読んでください。これらの聖句のどこで、サタンは神御自身を攻撃していますか。

サタンがヨブと神に対して行った攻撃は、彼が天において神に対して行った攻撃を反映しています。サタンによれば、ヨブは愛からではなく、利己的な関心から神に仕えました。ヨブは神から祝福を得るために神に仕え、神もヨブの奉仕をあてにしてヨブを祝福した、というのです。サタンの主張によれば、神の統治は、神が主張するような無我の愛ではなく、利己心にもとづいています。サタンによれば、人間の真の性質は無秩序の中に現されるものであつて、もし機会さえ与えられるなら、人間は神に反逆します。

「すべてのものをキリストは神からお受けになったが、彼は与えるためにお受けになったのである。天の宮廷ですべての被造物のために奉仕しておられるときもそうである。愛するみ子を通して、天父の生命はすべてのものに向かって流れ出る。み子を通して、それは賛美とよるこびの奉仕のうちに、愛の潮流となつて、すべてのものの根源である神へもどつて行く。このようにキリストを通して愛の循環が完成され、それは偉大な賦与者であられる神のご品性——生命の法則を象徴している。この法則が天において破られたのである。罪は利己心から起こつた。蔽うことをなす天使ルシファーが天の第一位を望んだ」（『各時代の希望』上巻3、4ページ）。

エゼキエルは神に対するルシファーの攻撃の戦略を理解する上で助けになる二つの言葉を用いています。

一つは、「取り引き」という言葉です（「お前の盛んな取り引き」〔エゼ 28：16、新国際訳〕。サタンは「盛んな取り引き」にかかわっていました。「取り引き」と訳されているこの言葉は「中傷」と訳すこともでき、その場合は、サタンが天において神に、またたぶんほかの天使たちに偽りの非難を浴びせることにかかわっていたことを暗示します。「中傷」は他人の評判を汚すことを意図した悪しき言葉で、あえて神の御心を無視し、神の裁きを受ける者の態度を描写しています（レビ 19：16、エレ 6：28～30）。それは分裂と無秩序をもたらします（II コリ 12：20）。サタンは聖書の中で神の民を非難・中傷する者、敵対者として描かれています（ゼカ 3：1、黙 12：10）。サタンは、「真理をよりどころとしていない。彼の内には真理がないからだ。悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、その父だからである」（ヨハ 8：44）。

この中傷はサタンをもう一つの重要な言葉である「不法」へと導きました（エゼ 28：16）。「不法」は確立された神の秩序を破壊する反社会的態度を示しています。それは憎しみや利己心から生まれ、物理的、社会的攻撃へと発展します。ある場合には、それは個人的な利益のために殺人を犯し、他人を搾取する結果につながります（創 49：5、ミカ 6：12）。神の被造物に不法と死をもたらしたという意味において、サタンは「最初から人殺し」（ヨハ 8：44）でした。

問8 ルシファーの天における神に対する敵対行為の最終的な結果は何でしたか。黙 12：7～9

ゆっくりと、しかも不可解な方法で、サタンの利己的な感情は神と神の御子に対するあからさまな攻撃の態度へと変わっていきました。初めのうちは隠されていたものが、やがて目に見えるものとなり、混乱と無秩序を生み出しました。天において、戦いが起こりました。これが、私たちが巻き込んでいる宇宙の戦いの始まりでした。サタンとその支持者たちは天において、十字架において敗北し、適当な時期に宇宙から根絶されます。罪の問題が解決するとき、墮落した人類は完全に永続的な神との一致に回復されます。同時に、神の被造物全体が完全な道徳的調和を取り戻します。

金曜日

今週のメッセージ

10月10日

「神が被造物にお与えになった自由を悪用したものがあつた。罪は、キリストの次に位し、最大の榮譽を神から受け、天の住民の中で最高の力と栄光を与えられていた者から始まつた。『黎明の子』ルシファーは、きよく汚れのない守護のケルブの第一の者であつた。彼は、大いなる創造主のみ前に立つていた。そして、永遠の神をめぐり照らすつきない栄光の輝きが、彼の上に宿つていた」(『人類のあけぼの』上巻4ページ)。

「天におけるルシファーは神の栄光という光のうちにあつて罪を犯したのである。彼には、ほかのどんな被造物に対するよりも神の愛のあられが与えられていた。神のご品性を理解し、神の恵みがわかつていながら、サタンは、自分自身の利己的で勝手な意思に従うことを選んだ。この選択は決定的なものであつた。彼を救うために神がおできになることはもうなかつた」(『各時代の希望』下巻、287、288ページ)。

「ヨブの信仰体験」

宗教とは本来自己を問うものであると思います。若い頃、何かを求めて仏教書などを読んでおりました。そんな中で田中清玄氏の自叙伝を読みました。田中氏は大東亜戦争当時東大の新人会に入会し、武装共産党の委員長になりました。府中刑務所に入獄した時、自分の生き方に迷いを感じ、名僧の山本玄峰老師に面会する機会が与えられ、思いをぶつけました。悩みを聞いた老師は、「おまえ自身が一体、何者なのか」と反対に問いかけたと言うのです。私は、その「おまえ自身が何者か」という言葉が私自身の問題になりました。私とはどのような存在なのか。私の苦しみは、今思うと世にある不条理でした。聖書を通じて神と出会い、私にこの世の不条理を受け入れる術が与えられました。世の不条理は、神との深い溝の中にある人間存在にあるのです。人間そのものが不条理なのだと思つたのです。そのことを教えてくれた御言葉は、ヨハネ9：1～3です。真つ暗闇の世界からひとすじの光が見えた思いでした。自分の見た現実だけがすべてではない。神の計画、神の御業を見せる目的のために行われている現実があることを、神と出会う時にわかるのです。それは、目に見える現実を絶対視してはならない。自分の思いを絶対視してはならない。偶像崇拜するな、謙遜になれとの戒めでした。まさにヨブ記にあるヨブの信仰体験でした。

八重山・宮古教会牧師 森 則光

— 寄稿メッセージ —

第3課

10月18日



墮落

● 暗唱聖句 ●

「わたしはなんと^{みじ}惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」

(ローマ7：24、新共同訳)

「わたしは、なんとというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」

(ローマ7：24、口語訳)

今週の聖句

創世記1～3章、ローマ3：9～18、5：10～21、6：16、
ペトロII・2：19

安息日午後

今週のテーマ

10月11日

「墮落」という言葉がアダムとエバの罪によって生じた人間の自由の喪失をさすために用いられた場合、それはふつう、罪が人間をある状態から別の状態——この場合は高い道徳的、靈的状态から墮落と抑圧、隷属の状態——に下落させたことを意味します。

エデンにおける墮落については詳しく啓示されていませんが、それでも聖書には、人間の性質ばかりでなく地球そのものさえも損なうような何かが起こったと理解するに十分な情報が与えられています。この墮落の結果は悲惨なものでした。事実、キリストによる私たちのための贖い^{あがな}の約束がなかったなら、絶望そのものだったでしょう。しかし、私たちはなお人間に何が起こったのかをしてみる必要があります。なぜなら、私たちが自分自身の実際の姿をながめるときにのみ、救いの功績と力をともなった十字架の栄光を理解することができるからです。

日曜日

エデンにおける反逆

10月12日

問1 創世記1～3章に、アダムとエバが神に反逆したことを裏づけるどんな証拠を見ることができますか。創2：16、17、3：2、3、6参照

創世記1～3章にアダムとエバの罪を描写する「反逆」という言葉は用いられていませんが、思想そのものは存在します。彼らは公然と神の命令に背いたばかりでなく、その反逆の過程においても、忠誠心を変えています。エバは敵の論法に耳を傾け、それが神の明白な言葉よりも信頼できると考えました。彼女は、神の命令があまりにも制限的であって、自分の最高の潜在能力を達成するためには、創造主からの独立を主張する必要があると判断しました。これが反逆でした。アダムは神の声の代わりに妻の声に聞き従い、彼女と反逆を共にしました。

問2 神への反逆としての罪はどんな直接的な結果をもたらしますか。
イザ59：2（創3：23、24比較）

アダムとエバの反逆は、彼らが初め神と享有していた親密な関係に終止符を打ちました。彼らの反逆は必然的に、彼らと神との関係だけでなく、彼ら相互の関係をも分断しました。神に対する彼らの反逆は、相互の愛と献身の代わりに相互の恥辱をもたらす結果となりました（創3：7）。彼らの個人間関係は調和を失いました（12節）。とりわけ、この反逆は彼らを神から引き離し、彼らにとって神が恐れるべき存在、逃れるべき存在であるという観念をもたらしました（8～10節）。神と人間を一つに結んでいた愛と調和が失われました。何らかの和解の行為が必要とされていました。

◆ あなたが罪を犯したときのことを考えてください。それは神との関係、また人々との関係にどんな影響を与えましたか。あなた自身の経験と創世記の記録との間に、どんな共通した原則が見られますか。

問3 ペトロⅡの2：19、ローマ6：16によれば、罪は罪人をどのように扱いますか。

罪の持つ破壊力を例示するために、パウロは時々それを暴君にたとえています。罪は、「一人の人によって……世に入り」(ロマ5：12)、死によって人間を支配し(ロマ5：21、6：12)、欺き(7：11)、人間のうちに住み(17節)、人間を奴隷にし(ロマ6：20)、死をもたらします(7：13)。アダムとエバの罪は、すべてのものをその墮落的な力に服従させたという意味において独特なものでした。サタンはこの世の支配者となりました(ヨハ12：31、14：30)。自治権を求めることにおいて、アダムとエバは神の主権をサタンの隷属的で墮落的な主権と交換しました。罪は、人間が自分自身の力では逃れることのできない普遍的な力となりました(ロマ5：12)。

問4 ローマ3：9～18によれば、人類は罪の支配下でどんな状態にありますか。

パウロはまた、アダムとエバの墮落によって自然界も罪の力に服するようになったと教えています。「被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり」(ロマ8：20)。罪の持つ破壊力と墮落力は地上の神の被造物にまで及びました。「服している」という動詞は、自然界がそれから真の美しさと意義深さを奪った何らかの力の権威のもとにあることを暗示しています。これは自然界そのもののもたらした結果でなく、ほかの何か、つまり罪の侵入の結果でした(ロマ5：12)。自然界は今や「虚無に服して」います。「虚無」という言葉はここでは、目的のないこと、空虚なことを意味しています。エフェソ4：17では、空しさを意味するこの言葉が自然界ではなく個人について、つまりキリストから離れて、「愚かな考えに従って」生きている人々を描写するのに用いられています。要するに、人間と同じく自然界も罪のゆえに墮落した状態にあるということです。墮落した世界を贖うことのできる人間世界以外からの力、自然界以外からの力の現れが必要とされていました。これはキリストを通してなされるのでした。

火曜日

靈的な死

10月14日

罪は人間の内的生命を傷つけました。かつて神が造られたこの宇宙を支配していた道徳的、靈的価値観はもはや生まれながらの人間の心を支配していません。人間は自分のうちに悪があることを知っているのです、よりよい何かを求めます。彼らはときどき善を行おうとしますが、次のことを発見するだけです。「肉の思いは死であり……肉の思いに従う者は、神に敵対しており、神の律法に従っていないからです。従えないのです」(ロマ8:6、7)。

人間の性質は道徳的、靈的に弱く、罪の力に抵抗できないので、人間のいるところはどこにでも罪と悪があります。これは普遍的な現象です。「正しい者はいない。一人もない」(ロマ3:10)。罪とは、人間の性質が神から切り離された状態です。墮落のゆえに、「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる。誰がそれを知りえようか」(エレ17:9)。聖書の中で人間の意志と知性の中心と考えられている「心」は、今や本質的に欺くもの、陰險なもの、信頼できないものと定義されるようになりました。

人間は自分の複雑な内面を完全に理解することがほとんどできなくなっており、自分自身では威厳のある生き方ができなくなっています(コヘ9:3)。彼らは恐怖と孤独の中で自己存在の深みと対立しながら生き、自分自身のうちで善を行おうと格闘していますが、しばしばその力がないことに気づきます(ガラ5:17)。彼らは自分と自分を取り巻く世界を完全に理解することができません。このように、彼らは神に関して全く無知の中で生きています(ロマ1:21～25)。この墮落と無感覚は自分自身に対する、他人に対する、そして神に対する罪深い行為となって現れます(マタ15:19)。

罪の墮落的な力は限界を知りません。神だけがその墮落的な影響力に歯止めをかけ、最終的に宇宙から根絶することがおできになります。もし、墮落後も、この地上に善なるものが残っていたとするなら、それは神がサタンの全面的な支配をお許しにならなかったからです。神は人類の代表としての女に、また悪の権力の現れとしての蛇に対して、次のように言われました。「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に わたしは敵意を置く」(創3:15)。この約束のゆえに、もし人間さえ望むなら、彼らが悪を憎み、命を選ぶ自由が残されていました。神が罪の墮落的な力に制限を加えることが可能となったのは、神が人間の苦境に介入される決定をされたからでした。人間は罪によって生じた恐ろしい状況から逃れる道を必要としています。

「食べると必ず死んでしまう」（創2：17）という、アダムに対する神の言葉は、死が神に対する反逆の結果であることを示しています。死と罪は切り離すことができません。この死は霊的な死にとどまらず、罪人の肉体的な死、また永遠の死をも意味しています。罪との関連のゆえに、死は単なる生物学的現象であるだけでなく、命の源である神からの永遠の分離、つまり永遠の滅びに至る分離という恐ろしい意識をももたらします。そのすべての現れ方において、死は罪と似ていて、普遍的で不可避なものです（ロマ5：12、ヘブ9：27）。罪がこの世界に侵入したとき、人類は宇宙から消滅しようとしている絶滅危惧種となりました。人間も人間以外のものも、惑星地球の上の神の被造物は絶滅への途上になりました。

問5 ローマ5：10～21を読んでください。死はどのようにして入りましたか。その原因は何でしたか。死を免れる唯一の方法は何ですか。

死と苦しみは罪の結果として、同時にこの世界に入ってきました。この地上に生まれ、育った人はだれひとり、悲嘆と苦しみから逃れることはできません。私たちは、苦しみが何であるかを言葉で説明することはできないかもしれませんが、深い経験的な知識によってそれを知っています。私たちが死ぬべき運命の罪人であることと、悲嘆や苦しみとの間には関係があると、聖書は教えているように思われます。死はあまりにも強力なので、私たちは死ぬ前から、病気や不安、恐怖によって生じる肉体的、感情的、心理的苦痛を通して、死の存在を実感します。その結果、人生の質は低下し、憂鬱感ゆううつに満たされます。

罪のもう一つの結果である病という現象は、「陰府よみにのぞんでいます」（詩編88：4）、「穴に下る者のうちに数えられ」（5節）と表現されています。死は毎日の人間存在のうちに突然入り込んできますが、これも罪という現象と直接かかわりのある人間の苦境の一部です。人間は、自分たちに代わって死ぬことによって彼らに命を与え、罪と苦しみ、死から解放してくれるお方を必要としていました。

◆ あなた自身、死に直面したとき、あるいはほかの人の死を見たとき、そこからどんなことを学びましたか。死の現実私たちが主に近づける上でどんな助けになりますか。

木曜日

人間の罪に対する神の反応

10月16日

問6 創世記3：8～13を読んでください。アダムとエバが罪を犯した後で、神はどのように彼らに近づいておられますか。神の質問の目的は何でしたか。

主が彼らに近づかれたのは、彼らの犯した罪を彼らと共に評価し、それに対して審判を下すためでした。審判の過程で質問がなされ、答えが与えられていますが、神はそれによって彼らがまさに有罪であって、その反逆は正当化されないことを彼らに認めさせようとしておられました。その結果は、エデンの園からの追放に象徴されているように、主からの分離でした。

問7 罪に対する神の反応はどのようなものですか（エフェ5：6）。私たちは神の怒りをどのように理解したらよいでしょうか。

神の怒りについて語るときには、いくつかのことを心にとめる必要があります。第一に、人間の怒りは神の怒りを理解するための尺度にはなりません。人間の怒りはしばしば不合理で、人を傷つけるものです。神の怒りは罪とは無関係で、おもにいやしを目的としています（ヘブ12：6、黙20：15～21：1）。第二に、人間の罪に対する神の怒りは、神が私たちのことを真剣に考えておられること、また神が反逆した私たちをも無視されないことをあかししています。人を無視することは軽蔑や無関心といった態度に現れます。神が私たちの罪に反発されるのは、私たちが神にとって重要な存在であることのあかしです。第三に、神の怒りは神の永続的な態度ではなく、むしろ不条理な罪と悪に対する神の反発です。それにつねに理由があって、罪が神の怒りを引き起こします（申4：24、25）。神の愛が永続的であるのに対して、神の怒りは一時的です（イザ54：8）。

罪のゆえに、必要とされたのは私たちを「来るべき怒り」（Iテサ1：10）から救うことのできるお方でした。

◆ もしあなたがだれかを愛しているとして、その人が苦しんでいるのを見るとき、あなたは起きていることに怒りを覚えませんか。このことは神の怒りの意味を理解する上でどんな点で助けになりますか。

〈罪がもたらしたもの〉

神からの分離 「エデンにおけるアダムは有利な立場にあったので、サタンの誘惑に抵抗し、彼に勝利することができることを、キリストは知っておられた。キリストはまた、人間がエデンの外では、墮落以来神の光と愛から離れていたのに、自分自身の力ではサタンの誘惑に抵抗することが不可能であることを知っておられた」(エレン・G・ホワイト『マラナタ』224 ページ)。

調和の欠如 「不義において、アダムは自分自身の律法となった。不従順によって、彼は束縛の下に置かれた。こうして、利己心から生まれた不協和音が人間の生き方に入り込んだ。人間の意志と神の意志はもはや調和しなくなった。アダムは反逆勢力と手を結び、自我が行動を開始した」(エレン・G・ホワイト『サインズ・オブ・ザ・タイムズ』1900年6月13日)。

自然界の反逆 「地上の生物の中で、アダムは王として立った。……しかし、罪を犯したとき、この支配権は失われた。彼自身が門戸を開いた反逆の精神は動物界にも広がった。こうして、人間の人生のみならず、動物界、森の木々、野の草、彼が呼吸する空気そのものまでが、すなわちすべてのものが悪の知識についての悲しい教訓を語るようになった」(エレン・G・ホワイト『驚くべき神の恵み』41 ページ)。

「神の愛に応える」

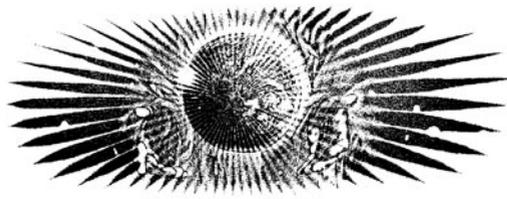
「心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。だれがこれを、よく知ることができようか」(エレミヤ 17:9、口語訳)とあります。「コロコロッと変わるから心」といわれます。朝に恵みを受けて喜んで奉仕の準備を始めたのに、昨日の失敗を思い出して、「なんと情けない。奉仕などできない!」と落ち込みます。神様はその情けない人間を見て怒られるでしょうか。しかしその罪人ではなく、人間をおとしめる悪をしかってくださるのです。神様が私^のたちを愛してくださったゆえに、御子なるイエス様が十字架上で全人類の罪の呪いを負って死なれることを許されました。もはや人類は罰せられることも、情けないと見捨てられることもありません。人間にできることはただその愛の大きさに圧倒されて、私の全てはあなたのものです。あなたの御用に用いてください、と祈るだけです。自分自身を神様に明け渡しましょう。

宮崎教会牧師 宇田川勇

— 寄稿メッセージ —

第4課

10月25日



あがな

贖いと神の主導

●暗唱聖句●

「秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、^{かしら}頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです」
(エフェソ1：9、10、新共同訳)

「御旨の奥義を、自らあらかじめ定められた計画に従って、わたしたちに示して下さいたのである。それは、時の満ちるに及んで実現されるご計画にほかならない。それによって、神は天にあるもの地にあるものを、ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである」
(エペソ1：9、10、口語訳)

今週の聖句

ローマ3：19～22、5：6～8、5：20、21、エフェソ1：4、
コロサイ1：26、27、テモテII・1：8、9、テトス1：2

安息日午後

今週のテーマ

10月18日

人間は道徳的自由を与えられていました。これは、神が地上に創造されたほかのいかなる生き物にも見られないものでした。ひとたび神がこの自由を人間に与えられたからには、それは人間のものであって、人間の性質・本質そのものを大きく変えることなしには、それを取り上げることはできませんでした。人間はこの自由を用いて、愛と感謝、心からの服従をもって神に従い、積極的に神に応答することもできれば、この自由を用いて、命の賜物を拒み、主に背くこともできました（結局、もし人間に反逆する選択肢がなかったなら、彼らは本当の意味で自由とは言えなかったでしょう）。反逆という恐るべき可能性を予見しておられた神は、それに応じて行動されました。こうして、人間が創造されるはるか昔から、また悪と罪が実際に生じる前から、救いの計画が神の御心の中に立てられていました。それはイエス・キリストの人格と働きに中心を置く計画でした。

問1 ローマ5：6～8を読んでください。これらの聖句によれば、神がイエスによって私たちを救おうとされたのはなぜですか。

神は人類を救う義務を負っておられたのではありません。神はそうするように強制されたのではありません。次のように言われる神を想像することは困難です。「もし我々がかくかくしかじかのことをしていたなら、アダムとエバは罪を犯すことがなかったかもしれない。それゆえに、我々はいま彼らを苦境から救うために何かをしなければならぬ」。しかし、人間は墮落によって自分自身に苦境を招いたのでした。「神は人間をまっすぐに造られたが 人間は複雑な考え方をしたが、ということ」(コヘ7：29)。

もし神が私たちを救う義務を負っていると感じになったのなら、救いは私たちに相応のものだったかもしれません。しかし、実際はその反対です。救いは私たちに相応のものではないのに、神は喜んでそれを私たちに与えてくださいました。私たちのための神の救いの御業がいつそう注目されるのはそのためです。なぜなら、私たちのための神の御業は、強制された行為ではなく、愛の心から出た行為だからです。創造主なる神は被造物である私たちにいかなる義務も負っておられませんでした。

問2 ローマ3：19～22を読んでください。パウロはここで、私たちがどのようにして救われたと述べていますか。律法は罪によって生じた問題を解決する上でどんな役割を果たしますか。

罪のゆえに、人間が律法に従うことによって、神との元の関係を回復することは不可能となりました(ロマ8：3、ガラ3：21参照)。律法が私たちを救うことができないのは、死体に食べさせても生き返らないのと同じです。もし何かが起こるためには、神御自身が率先して何かを行わねばなりませんでした。そして、神はそれを十字架上のイエスを通して啓示された神の義の啓示を通してなされました。この義は律法の行いではなく、信仰によって、信じる者に与えられます。もし救いが服従によって得られるものだったなら、神は私たちを救う義務を負われたことでしょう。しかし、神の決定は、人間が御子イエス・キリストの働きと人格によってのみ赦され、神との永遠の交わりに回復されることでした。

月曜日

神の恵みの神秘

10月20日

「わたしたちはこの御子において、その血によってあがな贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです」（エフェ1：7）。

罪がこの世界に侵入したとき、宇宙の知的存在者たちは神がこの反逆した人類をどのように扱われるか疑問に思っていたことでしょう。彼らは驚嘆することになります。おそらくそれまで一度も見たことのないこと、すなわち神の愛と力の一面が人間の墮落に関連して現されるのを目撃することになるからでした。神は恵みの力によってこの地上における罪を打ち破ろうとしておられました。このような状況において、神は御自分が本質的に情け深いお方であって、これらの罪深く反逆的な被造物に対して憐れみ深いお方であることを示されました。イエスも父なる神について次のように証言しておられます。「いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである」（ルカ6：35）。

問3 パウロは罪の現象と神の恵みの啓示を対比していますが、これにはどんな深い意味がありますか。ロマ5：20、21

聖書の中では、恵みは神の愛の一面であって、特別な方法で罪人に提供されています。それは神の性質の、動的で、一貫した、永続的な側面、すなわち罪深い被造物を絶えず神との調和に回復しようとする神の側面を現しているように思われます。恵みについての聖書の思想は、キリストの贖いの業が私たちのための賜物であって、私たちに不相応な救いの業であることを再確認させてくれます。神の恵みは、私たちの罪が赦されないもの、正当化されないもの、永遠の死に値するものであることを示しています。それなのに、この死の代わりに、私たちは命、しかも永遠の命の希望と約束を与えられました。最終的に、驚くべきこの神の性質の側面はキリストの人格と業という比類ない方法において宇宙に啓示されました。私たちが「神の豊かな恵み」（エフェ1：7）の恩恵にあずかるのは、ただキリストにおいてだけです。

- ◆ コリント II の 8：9 の中で、パウロは何について語っていますか。あなたのためのキリストの御業の結果として、あなたの生き方はどのように変わりましたか。

人類の墮落後、神は私たちを救う義務を負わせられたわけではありません。しかし、神は私たちを救おうとされました。しかも、神にとって途方もない犠牲をともなうこの決定は、後から思いついた考えではありませんでした。

問4 エフェソ 1:4、コロサイ 1:26、27、テモテ II の 1:8、9、テトス 1:2 を読んでください。これらの聖句は救いの計画が立てられた時について何と述べていますか。

新約聖書は神の秘められた計画についていくつかのことを啓示しています。

第一に、神の秘められた計画は「天地創造の前に」立案されました（エフェ 1:4）。このことは、人間が罪に陥るずっと以前に、三位一体の神がこの問題に対処する計画を立てておられたことを暗示します。

第二に、この神の計画は「世の初めから代々にわたって隠されて」いました（コロ 1:26）。この計画はあらかじめ形づくられていて、しかも特定の時に施行されるように決められていました。この意味において、それは代々にわたって神のうちに隠されてきました。

第三に、この秘められた計画は具体的にはキリストをさしていました（コロ 1:27）。このことは、罪深い人類のためのキリストの位格、その奉仕、死、復活、執り成しについての秘められた計画をさしています。これが基本的に、キリストによる救いの福音、キリスト教の福音です（エフェ 6:19）。

第四に、この計画をより明確に定義すると、「天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめ」るための神の目的です（エフェ 1:10）。この計画は罪によって損なわれた宇宙の調和をキリストによって回復することでした。この計画の効果は、教会の中で異邦人とユダヤ人が一致することにおいてすでに現れていました（エフェ 3:6）。

第五に、天地創造の前に三位一体の神のうちにひそかに立案されたこの計画は今、キリストの来臨を通して人類の歴史に現されました。

◆ 天地創造の前から、神は私たち一人ひとりを含むこの世界を救う計画を立てておられました。私たちの存在する前から私たちを救うという、この驚くべき真理は私たちにどんな希望を与えてくれますか。

水曜日

十字架という方法

10月22日

神はいくつかの方法で人間の反逆に対処することがおできになりました。直ちにアダムとエバを、そして地球を滅ぼすことがおできになり、また、彼らをその運命にまかせ、見捨てることもおできになりました。つまり、罪の必然的な結果である永遠の滅びにゆだねることもおできになったのです。

しかし、神に不可能なことが一つありました。それは、彼らの反逆を無視し、あたかも何事もなかったかのように振る舞い、彼らの関係を以前のように存続させることでした。

結局のところ、神はどうされたでしょうか。神は彼らを滅ぼすことも、彼らを見捨てることも、彼らを無視することもされませんでした。代わりに、神はキリストによる永遠の救いの目的を実行されたのでした。

問5 マルコ 10：45、ガラテヤ 1：4、2：20、エフェソ 5：2、テトス 2：14 を読んでください。この中にどんな重要な主題が繰り返されていますか。

ひとたび神が私たちを救おうと決意されたとき、その方法については選択肢がいくつもあったわけではありません。事実、一つしかありませんでした。罪はキリストの受肉と奉仕、死、復活、執り成しによってのみ解決されるのでした。私たちが永遠の滅びを免れるためには、イエスが私たちのために御自身を「献げる」必要がありました。私たちが救われるためには、キリストの受肉と死が不可避でした。言い換えるなら、天国への道はただ一つ、十字架上のキリストの心臓を貫いて通っているのです。

ゲッセマネの園で、死の苦悩を味わい（マタ 26：36～46）、世の罪を負って、父なる神に祈られたとき、イエスは事実上、人類の救いを完成する上でほかに選択肢があるか否かを尋ねられたのでした。その答えは神の沈黙に包まれて与えられました。キリストの犠牲による以外に、人間の問題を解決する方法はありませんでした。

天地創造の前の、秘められた神の計画において、神の御子は人間の身代わり・保証として死ぬことを提案されました。イエスは私たちのために御自身を「献げて」くださったのです。そしてイエスは、自発的に、愛の心からそうされたのです。しかし、ひとたびこの決心をされたからには、彼の死は不可避でした。「わたしは命を、再び受けるために、捨てる。……だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる」（ヨハ 10：17、18）。

問6 以下の聖句によれば、イエスは御自分の救いの使命を達成するためにどんなことをする「必要」がありましたか。ルカ 4：43、9：22、17：25、19：5、22：37、24：7、26、44

これらの聖句のほとんどに、「～する必要がある」（ギリシア語で、“デイ”）と訳すことのできる動詞が含まれています。この動詞はイエスの生涯における非常に重要な側面を表しています。イエスの全生涯はその使命を達成するために成し遂げる必要のあることによって方向づけられていました。「わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない [行う必要がある]」（ヨハ 9：4）。公生涯の始めにおいて、イエスは弟子たちに次のように言うておられます。「ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならない。わたしはそのために遣わされたのだ」（ルカ 4：43）。イエスの働きは明らかに、人類の救いのための神の計画を達成するための意志によって決定づけられていました。イエスの生涯のすべての側面はこの計画の一部でした。たとえば、イエスはザアカイに次のように言うておられます。「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい [わたしは泊まる必要がある]」（ルカ 19：5）。

しかし、イエスの働きの真の目標は神の国の福音を伝える義務を超越したところにありました。イエスのたどる「必要のある」暗い道がありました。イエスはエルサレムに行く必要がありました。行かないことを選ぶこともできましたが、それが神の計画のためには不可避であることを、イエスは知っておられました。それゆえに、イエスは弟子たちに、「御自分が必ずエルサレムに行って [行く必要がある]、……多くの苦しみを受けて殺され [る必要がある]、……と弟子たちに打ち明け始められた」のでした（マタ 16：21）。イエスがエルサレムに行こうとしておられたのは、御自分が今の時代の者たちから排斥され（ルカ 17：25）、犯罪人の一人に数えられ（22：37）、十字架に上げられる必要があったからです（ヨハ 3：14、12：34）。しかし、御自分の使命を達成するためには死ぬだけでは不十分でした。イエスは復活し（使徒 17：3）、栄光のうちに迎えられ、すべての預言が実現するまでそこに留まる必要がありました（使徒 3：21）。イエスは三位一体の神によって立てられた計画に従っておられました。

金曜日

今週のメッセージ

10月24日

恵みを定義する 「もし私たちが墮落していなかったなら、この『恵み』という言葉の意味を学ぶことは決してなかったであろう。神は、御自分の奉仕を行い、御自分のすべての命令に従順な罪なき天使たちを愛されるが、彼らに恵みを与えられることはない。これらの天の存在者たちは恵みについて何も知らない。彼らが全く恵みを必要としないのは、一度も罪を犯したことがないからである。恵みは分不相応の人間に示された神の特質である。私たちが恵みを求めたのではなく、恵みが私たちを求めて送られたのである。恵みを渴望するすべての人に、神は喜んでそれをお与えになる。私たちにその価値があるからでなく、むしろ全くその価値がないからである」(エレン・G・ホワイト『今日のいのち』100ページ)。

贖いは後知恵^{あとちえ}ではない 「恵みの目的と計画は永遠の昔から存在した。天地創造の前から、人間を創造し、これに神の御心を行う能力を授けることが神の協議において決まっていた。しかし、人間の背信とそのすべての結果は全能の神から隠されていたわけではなかった。それでも、神は御自分の永遠の目的を遂行することを中止されなかった。なぜなら、主は王位を正しく存続させられるからである。神は始めから終わりをご存じである。……したがって、贖いは後知恵ではなかった」(エレン・G・ホワイト『驚くべき神の恵み』129ページ)。

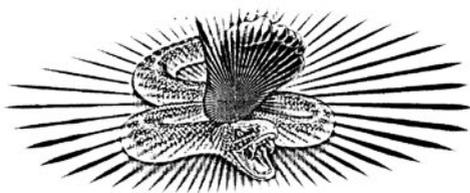
「イエスは死なれるだけでなく、耐えるべき恥辱と屈辱、受けるべき虐待を正確に知っておられた。イエスは十字架上の不名誉な死を強要されたのではなかった。それでも、イエスは御自分の魂を罪の供え物とされた。世を救おうとする神の思いはキリストの思いであった。キリスト御自身の愛は神の愛と一つであって、その愛がキリストを強要したのであった」(エレン・G・ホワイト『ザ・バイブル・エコー』11月25日、1895年)。

「神の恵みの神秘」

今週の研究の中心は何と言っても、神の恵みの神秘です。神の恵みはキリストの十字架を通して私達に示されました。「天国への道はただ一つ、十字架上のキリストの心臓を貫いて通る」。この道しかなかったのです。パウロは言います。「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。…わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」(ローマ5:6～8)。ベタニアの一人の女性が高価な香油をイエス様の頭に注ぎかけます。これは、イエス様に対する彼女の讚美であり、感謝であり、礼拝行為でした。これを見た弟子達が、怒りと軽蔑の思いを込めて彼女を責めたてます。無駄使いだと言って。霊の眼をもって香油を注いだ女性のように、私達も今日、十字架の奥義が無駄とならぬよう霊的回復を祈りたいと思います。

佐世保・福江・長崎教会牧師 広田信之

— 寄稿メッセージ —



あがな 布告された贖い

● 暗唱聖句 ●

「彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり 彼が打ち砕かれたのはわたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ 彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」 (イザヤ書 53：5、新共同訳)

「しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」 (イザヤ書 53：5、口語訳)

● 今週の聖句 ● 創世記 3：15、22：1～18、出エジプト記 32章、34：6～10、ダニエル書 9章

安息日午後

今週のテーマ

10月25日

ひとたび罪の恐るべき現実と力に対する解決策を提示されると、主はすぐに墮落した人間に対して福音を布告されました（宇宙歴史における最初の宣教師は被造物ではなく、創造主御自身でした）。主はまた、この贖いの約束が彼らの心に絶えず生き続けるようにされました。この約束がイエスを通して現実のものとなるたびに、御自分の民をそれに備えさせるためでした。神は、旧約聖書の神の民の歴史を通じて、御自分の救いの計画と直接結びついた制度と律法を制定されました。それらは救いの働きを例示するものでした。この犠牲制度、祭司の務め、さらには王（メシアの象徴）といった方法によって、彼らは最高の犠牲、真の大祭司の到来、神の救いの目的を成就するメシアなる王の支配を待望することができました。

日曜日

アダムとエバに対する約束

10月26日

問1 創世記3：1～15を、特に15節に注意しながら読んでください。15節には何と書かれていますか。それは私たちにどんな希望を与えてくれますか。

クリスチャンは創世記3：15をメシアの預言と考えています。

第一に、創世記3：15の前後関係を見ると、蛇が神に対する悪と反逆の器であることがわかります（黙12：9）。エデンの園で、この悪の勢力はアダムとエバを誘惑し、その支配権を女の子孫にまで広げました。

第二に、創世記3：15は、女の子孫が蛇を滅ぼすと宣言しています。蛇は女の子孫のかかとを「突き」ますが、女の子孫は蛇の頭を「砕き」ます。どちらにもヘブライ語の動詞“シューフ”（傷つける、打つ、砕く）が用いられていますが、傷の致命度はそれを受けた部位によります。女の子孫に対する（かかとへの）攻撃は致命的なものではありません。しかし、女の子孫は蛇の頭を砕くので、蛇は完全に滅びます。

第三に、ヘブライ語の名詞“ゼラ”（子孫）は一般的に、一つのグループとしての子孫の意味での「子孫、末裔、家系」^{まつえい}を意味します。しかし、それはまた、一人の子孫を意味することもあります（たとえば、サム下7：12、13）。創世記3：15には、両方の用法が見られます。つまり、それは女（忠実な教会）と蛇・サタン（その追隨者）の子孫〔複数〕について、また「お前〔単数〕の頭」、つまり蛇の頭を「砕く」女（「彼」）の、一人の男の子孫について述べています。「子孫」が特定の子孫をさす場合にはいつでも、それに続く代名詞は単数形になっています。女の「子孫」はイエスです。

創世記3：15が暗示することは、罪がこの世界に入ったときにすぐ、キリストによる神の永遠の救いの計画が実行に移されたということです。アダムとエバが永遠の死を経験しなかったのは、神の視点からすると、キリストが「天地創造の時から、屠^{ほふ}られた小羊」（黙13：8）であるからです。アダムとエバは、救いの約束が実現する日を待ち望みながら、エデンの園を去りました。

◆ 当初から、神の計画は私たちを贖い、サタンを滅ぼすことでした。すべてが終わりを告げるときに、滅びる者でなく、贖われる者の中に入ることができるように、あなたは毎日、この素晴らしい恵みをどのように自分のものとしていますか（最終的には、救われるか、滅びるかのどちらかです）。

問2 創世記 22：1～12 を読んでください。アブラハムはどのような試練に直面しましたか。主がアブラハムにこのような要求をされたのはなぜですか。どんな奥深い問題が危うくなっていましたか。

創世記 22 章は試練が必要であった理由に言及していませんが、その理由は、神がアブラハムと結んだ契約と関係があったように思われます。この契約関係において、主は族長（アブラハム）に次のように期待しておられました。「あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい」（創 17：1）。アブラハムは必ずしもこの標準に達したわけではありませんでした（創 16：1～4、20：1～10）。

イサクは契約による約束の子であって、アブラハムは彼によって世界を祝福することになっていました。したがって、この子がいなければ、神が族長に与えられた約束は実現不可能でした。ある意味で、神はアブラハムに息子をささげるように要求することによって、アブラハムとの契約関係が終了したこと、彼に与えられた特別な約束が終わったことを告げておられたのでした。それは、アブラハムが地上の諸国民を祝福する神の器でなくなることを意味していました（創 12：3）。しかし、アブラハムは、神の憐れみと恵みに心から信頼し、特に自分の息子を自発的に神にお返しすることにおいて、神に対する信仰と献身を現しました（ヘブ 11：19）。

問3 契約の更新を可能にしたものは何でしたか。創 22：13～18

アブラハムに自分の息子をささげるように要求することによって、神は彼に対する宣告を申し渡し、彼のための特別な目的を終了しようとしておられました。しかしながら、イサクの代わりに雄羊がささげられたとき、すべてが一変しました。神はアブラハムが最も必要としていたもの、つまり息子の代わりとなる犠牲の動物を提供されました。それによって、主がアブラハムとの契約を更新されることが可能となりました。人間の犠牲（つまり、罪人の死）は、アブラハムでなく主によって提供された犠牲の供え物に取って代わられました。こうして、アブラハムは身代わりによる贖いという福音の秘められた計画を見たのでした。なぜなら、イエスを通して、「それ〔犠牲の供え物〕が備えられる」からです（創 22：14、新国際訳）。

火曜日

モーセと救いの啓示

10月28日

問4 イスラエルの民がシナイ山で行なった偶像礼拝に対して神はなぜ厳しく応答されたのでしょうか。出 32：7～10

この偶像礼拝は神に対する反逆行為であって、神が彼らと結ばれたばかりの契約を破ることでした。アダムとエバ同様、彼らは孤立状態に置かれました。もしモーセが彼らのために執り成していなかったなら（出 32：11～14）、彼らは滅びていたでしょう。

問5 この事件の後で、モーセは神に何と言っていますか（出 32：30～32）。ここに、福音の約束がどのように現されていますか。

モーセは民を赦しませんでした。彼らは神に対して罪を犯したのだと彼は明言しました。しかし、モーセはまた、自分が主に赦しを求めに行くつもりであると民に告げています。赦しが非常に高価なものであること、また赦しが罪に対する無関心と全く別であることを、モーセは知っていました（民の偶像礼拝に対する主の応答がそのことを最もよく示しています）。モーセ自身が民を執り成す者、主の前の仲保者となって、民のために罪からの贖いを受けようとします。彼はそれから思いもよらぬことをします。自分自身を贖いの手段として主にささげたのです！

もし民が再び主と和解することができるのであれば、モーセはいのちの書から自分の名前が消されてもよいと考えました（出 32：32——詩編 69：29、口語訳 69：28、フィリ 4：3 参照）。明らかに、主はこの無私の提案を受け入れることがおできになりませんでした。モーセの命も罪を贖うことはできませんでした。

問6 主は最終的にどのようにして問題を解決されますか。出 34：6～10

主は御自身を、赦す神としてモーセに啓示されました。「罪と背きと過ちを赦す」（出 34：7）とあるように、この赦しは包括的なものです。「赦す」と訳されたヘブライ語は字義的には「負う」を意味します。神は私たちの罪を私たちから取り除き、御自身で負われるのです。モーセには、それができませんでした。神は御自分の僕 [イエス] を通してそれを成し遂げることをすでに決定しておられました。モーセとイスラエルの子らが必要とするものは、神によって提供されていました。

問7 イザヤ書 52：13～53：12 を読んでください。ここに、どんな大いなる希望と約束が与えられていますか。

この部分は旧約聖書の中でも最も荘厳な部分の一つです。明言はしていませんが、それは贖罪^{しよくざい}の手段（人間と神とのあいだの障壁を取り除くもの）としてのイスラエルの犠牲制度の限界と無力さを明らかにしています。罪の問題はあまりにも重大なので、主の僕しかそれを解決することができません。この聖句はイスラエルの民と主の僕の経験を描写しています。

「イスラエルの民」 民は不信仰と誤った判断、告白と悔い改めという二つの経験をしました。初め、主の僕の姿は損なわれ、人とは見えず（イザ 52:14）、「神の手にかかり、打たれた」者のように見えました（53:4）。神が彼を拒まれたように見えたので、民もまた彼を軽蔑し、拒みました（3節）。民はその後、主の僕の経験には神の目的があったこと、つまり彼が民の悲しみと弱さを御自身に負われたことを悟ります（4節）。彼は民の身代わりとして、民の罪を負い、彼らのために死んでおられたのです。主の僕の犠牲という光を通して、民は自分自身の真の姿を見ました。「わたしたちは羊の群れ 道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた」（イザ 53:6）。私たちは十字架を眺めることによるのみ、罪のゆがんだ姿を見ることができません。

「主の僕」 主の僕の経験は極度の苦痛に満ちたものでした。彼は孤独で、人々から拒絶され（イザ 53:3）、悲しみと苦しみを負い、抑圧され、苦しめられ（7節）、「命ある者の地から断たれ」ました（8節）。しかし、このような取り扱いは正当化されるものではありませんでした。「彼は不法を働かず その口に偽りもなかった」からです（9節）。このような罪のないお方が苦しまれたのはなぜでしょうか。それは、主の僕の命が「償いの献げ物」としてささげられていたからでした（10節）。民を^{ただ}義しく、罪なき者と宣言するために、彼は民の罪を負い、彼らのために死んでおられたのです（11、12節）。しかし、この身代わりの死の後で、彼は再び光を見（11節）、高く上げられることになっていました（イザ 52:13）。

キリストの身代わりの死についてのこの預言的な描写は、罪を贖う唯一の効果的な方法としてイザヤによって書かれたものでした。私たちが神との交わりに回復されるために、キリストは私たちの身代わりとなられました。

木曜日

ダニエル書に布告される

10月30日

問8 ダニエル書9：7～11を読んでください。ダニエルはその祈りの中でイスラエルの民の状態をどのように描写していますか。

神のいやしと罪からの解放にあずかるためには、私たちはまず罪人としての、また神の啓示された御心への違反者としての自分の状態を認める必要があります。人間の根本的な問題の一つは、私たちが重大な問題をかかえていること、また私たちが赦しと創造主との和解を必要としていることを積極的に認めようとしないことにあります。ダニエルがそうであったように、たとえ赦された罪人であっても、私たちが日ごとに神の赦しの恵みを必要としていることを絶えず認める必要があります。

問9 ダニエルは主に何を求めていますか。それは何を根拠としていますか。ダニ9：16～19

ひとたび罪人としての自分の状態を悟るとき、私たちは神との関係に関してなさねばならないある重要なことに気づきます。それは、赦しを受けるためには、それを求めねばならないということです。ダニエルは罪人としての自分の状態から抜け出すために、神の憐れみ、神の驚くべき恵みに全面的に信頼しました。

ダニエル書9章にはまた、神が罪の問題に対処される「方法」と、それがなされる期間、つまり「時」についての神の預言が記されています（ダニ9：24～27参照）。その「方法」とは、油注がれた君、メシア、イスラエルのほかのすべての王がさし示し、代表している王によってでした。彼の犠牲の死と祭司職の始まる「時」（聖所の油注ぎ）は70週（490年）という言葉のうちに示されています。この預言期間は紀元前457年から紀元34年に及んでいます。神は御自分の民にメシアの到来に備えるように期待されました。この信じがたい預言は、はっきりしたかたちで、神が御自分の救いの働きのすべての面を完全に支配しておられること、また神がそれによって永遠から意図されていた救いの目的を達成されることを示しています。

◆ 私たちはイエスを救い主として受け入れていても、イエスの救いの恵みをつねに必要なことを覚えなければなりません。このことは私たちの救いの確信を脅かすものですか。それともそれを強めるものですか。

即座の身代わり 「人がサタンの誘惑を受け入れ、神の禁じられたことを行ったそのとき、神の御子キリストが生者と死者のあいだに立ち、『刑罰をわたしの上にくださない。わたしが人の代わりに立ちます。彼にもういちど機会を与えない』と言われた」(『SDA 聖書注解』第1巻 1085 ページ、エレン・G・ホワイト注)。

イサクの犠牲 「アブラハムに要求された犠牲は、彼自身のためとその後の子孫のためばかりではなく、天と他の諸世界の罪のない者たちの教訓のためでもあった。キリストとサタンとの争闘の場、すなわち、贖罪の計画が行われるところは、宇宙の教科書である。アブラハムが神の約束に対する信仰の欠如をあらわしたために、サタンは、天使たちと神の前で彼を非難し、契約の条件を破ったので、祝福に値しないと言った。神は全天の前で、神のしもべの忠誠を試み、完全に服従すること以外は何物も受け入れられないことを実証して、彼らの前に救いの計画をさらに明らかに示そうとされた」(『人類のあけぼの』上巻 161、162 ページ)。

イザヤ書 53 章の重要性 「この章を研究しなさい。それは神の小羊としてのキリストを提示している。うぬぼれで高ぶっている者たち、魂が虚栄心に満ちている者たちは、彼らの贖い主についてのこの描写をながめ、塵の中でへりくだらねばならない。この章全体を暗記しなさい。その影響力が、罪によって汚れ、自己称揚によって高ぶった魂を服従させ、謙遜にするであろう」(『SDA 聖書注解』第4巻 1147 ページ、エレン・G・ホワイト注)。

「わたしと主の十字架」

わたしが教会に来始めたのは、イエス様の十字架の救いの意味がはっきり理解できてからというわけではありませんでした。今思いますと、クリスチャンになっても実感として心底わかっていたとは言えません。どうして、十字架の意味がわからなかったのか？ それは、自分は善い人だと思っていたからであり、善い人を目指そうとしていたからです。聖書の道徳面、倫理面に感心はしていました。でも、それはキリストの愛を理解していることは別でした。病気や挫折体験を通して個人的に主の十字架の愛を悟ったのは、エフェソ1章、ヨハネ6章28、29節を通してでした。今になって、神様は「善い人」となることではなく、「信じる者」になることを望んでおられる、と確信するに至っています。特にエフェソ1：4にある「天地創造の前に」という、主のご配慮には圧倒される思いです。

久留米・伊万里教会牧師 平田泰三

— 寄稿メッセージ —



あがな

象徴に見る贖い（1）

●暗唱聖句●

「知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです」

（ペトロⅠ・1：18、19、新共同訳）

「あなたがたのよく知っているとおりに、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」（ペテロ第Ⅰ・1：18、19、口語訳）

今週の聖句

創世記3：21、4：3～5、レビ記17：11、ローマ3：23、エフェソ2：11～13、ペトロⅠ・1：18、19

安息日午後

今週のテーマ

11月1日

聖書に記されている犠牲制度は、神が罪の問題を解決される方法を例示するために定められたものでした。その儀式的中心にあったのは犠牲の動物の血でした。その動物の命が注がれたのは、悔い改めた罪人の命が救われるためでした。動物は私たちの命の代わりに御自分の命をささげられるイエスの象徴でした。

悔い改めた罪人が主のもとに犠牲を携えてきたとき、彼らは自分が死に値する罪人であることを認めていました。しかし、彼らはまた、主が自分たちの身代わりとしてささげられた犠牲の命を受け入れることによって赦しを与えてくださると信じることによって、信仰を現していました。私たちの罪の責任を受け入れることは絶対に必要なことです（これが悔い改めであり、告白です）。十字架の光に従って、自分たちが赦しを必要としている罪人であることを認め、へりくだってキリストのうちに自分たちの罪を取り除く神の小羊を認める人たちが清めにあずかることができます。

問1 聖書における動物の犠牲の起源はどこまでさかのぼることができますか。創3：21、4：3～5参照

聖書においては、犠牲の動物とそれを携えてきた悔い改めた罪人とはほとんど同一視されていたので、動物の命はその罪人の命を意味し、動物の血は贖いの手段となりました（レビ17：11）。

問2 レビ記17：11を読んでください。この聖句はどんな重要なことを教えていますか。

聖書の犠牲制度には、数多くの象徴が見られます。第一に、動物の死は個人の死を意味していたので、犠牲の行為は救いの行為、神の恵みと愛の現れでした。神が喜んでほかの生き物の死を受け入れられたのは、人間の命を守り、彼らとの交わりを継続されるためでした。第二に、聖書によれば、動物の命は実際には罪人の命を贖うことができませんでした。したがって、犠牲の動物の死は象徴的な機能しか持っていませんでした。それは、女の子孫、つまり多くの人の身代金として御自分の命をささげられるイエスの死を指し示していました（マコ10：45）。第三に、犠牲の動物を殺すことはまた、罪が重大なものであり、赦しが高価なものであることを例示していました。動物の命を奪うことはアダムとエバにとって非常に苦痛に満ちた行為であったに違いありません。たぶん、大部分のイスラエル人にとってそうだったでしょう。彼らはその過程で、罪が死と切り離せないものであること、また赦しが罪を大目に見ることと同じでないことを理解しました。神が私たちの贖いのために払われる代価は、「きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血」です（Iペト1：19）。

罪がこの世界に入ったとき、神は直ちにこれらの象徴的、教育的機能を持つ犠牲制度を制定されました。アダムとエバがささげた最初の犠牲は、来るべき贖い主に対する爆発的な希望でした。罪悪感と死の痛みの中でささげられた希望でした。

◆ あなたは罪の問題をどれほど深刻に受けとめていますか。あなたは罪に勝利することにどれほどの苦しみを感じていますか。Iペト4：1参照

月曜日

罪と不浄

11月3日

レビ記は罪と不浄の問題を詳細に扱っていますが、特に浄・不浄、汚れ・清めの問題を強調しています。不浄は道徳的な罪そのものと同様、契約関係を損なうものと見なされています。不浄に関する教えは、イスラエル人に自らを汚すものを避けさせることを目的としています。清めに関する規定は、イスラエル人が目の前に清い状態を回復する方法について教えています。

不浄の原因となるものがいくつかありますが、その中には避けられないものもあります。たとえば、女性が出産するときに受ける汚れがあります（レビ 12 章）。この場合は、汚れは出産にともなう出血の結果です（レビ 12：4、5、7——ほかの汚れについては、レビ 15：19～30 参照）。漏出のある男性も不浄と見なされました（レビ 15：1～15、16～18 節参照）。

以上の場合、当事者はキャリアー（保菌者）、感染者でした。したがって、彼（彼女）はほかの人や聖なる物に触れることを禁じられていました。洗浄や隔離が強調されているのは、明らかに衛生上の配慮からです。しかし、神学的な問題もありました。汚れた人は他人との接触を禁じられ、聖所から締め出されました。このように、「不浄」は、人が神と他人から切り離されることの比喩とされています。事実、不浄はいつでも、死を連想させるものでした。それは、死体（民 6：6、7、11）、病気（レビ 13、14 章）、出血（生命の消費）、精（命の種）の漏出と関連しています。重い皮膚病にかかった人は完全に汚れていて、死者と見なされました（民 12：9～12）。

汚れた人は死の世界にあって、清めの儀式によってのみそこから逃れることができました。そうでなければ、彼は神とほかの神の民から永久に隔離されるのでした（レビ 15：31）。不浄についての聖書の観念は、人間が根本的に汚れた環境にあって、ほとんど生まれながらにして汚れた状態にあることを暗示します。彼らが自由に主に近づくためには清めを必要とします。この清めはおもに犠牲の動物の血によってなされるのでした（レビ 12：8）。

- ◆ エフェソ 2：11～13 を読んでください。汚れという言葉は用いられていませんが、これらの聖句には上記の思想がどのように表されていますか。私たちは今日、どんな「汚れ」に直面していますか。どうしたら清められますか。

問3 レビ記4：3、13、22、27を読んでください。これらの聖句は罪について、また罪の贖いを必要とする人についてどんなことを教えていますか。ロマ3：23、5：12 参照

これら贖罪の献げ物から多くの教訓を学ぶことができます。

第一に、贖罪の献げ物とされる動物の種類はその人の経済状態によって決まっております(レビ5：7～12)、主が人々の経済状態に配慮されることを示していました。ここで重要なのは、キリストによる救いがこの世における個人の状況にかかわらず、すべての人のためにあるということです。

第二に、犠牲の動物は傷のないもの、健康なもの、身体的な欠陥のないものでなければなりません(レビ4：3)。罪人は欠陥があり、道徳的に汚れていましたが、神の小羊を現す犠牲の動物は違いました。

問4 ペトロIの1：18、19を読んでください。イエスのどんな重要な側面がこれらの無傷の犠牲のうちに予示されていましたか。イエスのこの側面が私たちと救いの計画にとって非常に重要なのはなぜですか。ロマ5：19、IIコリ5：21、ヘブ4：15

もう一つ重要なことは、贖罪の献げ物が故意でない罪と故意の罪の両方(レビ5：1～5)、それに儀式的な汚れ(レビ12：6、7)を贖うということです。このことの持つ道徳的教訓は、もし罪人が悔い改めるなら、神には赦すことのできない罪はなかったということです。道徳的、儀式的な汚れは犠牲の血によって、悔い改めた罪人から象徴的に取り除かれました。しかし、実際には、キリストの血だけが罪から清めることができました。これらの犠牲に予示されている大いなる福音は、私たちの過去がどのようなものであれ、どれほど墮落しているようが、私たちはイエスによって回復といやし、赦しと清めにあずかることができるということです。

◆ だれでも自分の救いを疑うことがあります。あるいは、神の前における自分の立場を疑うことも、時にはよいことなのかもしれません。というのは、自分では救われていると思っても、最後には救われていない人たちがいるからです(マタ7：22、23)。私たちはどうしたら、ごうまん傲慢にならない範囲で自分の救いを確信することができますか。

水曜日

罪と不浄からの清め

11月5日

問5 犠牲をささげるときの祭司と個人の役割が次の聖句にどのように描かれていますか。レビ4:5～7、28～31

犠牲の献げ物を理解しようと思えば、いくつかの儀式が重要になります。悔い改めた罪人が犠牲の動物を聖所に連れてきたなら、犠牲の上に手を置いて、それを屠^{ほふ}ります。日ごとの犠牲において手を置くことは、そうすれば「その人の罪を贖う儀式を行うものとして受け入れられる」（レビ1:4）という言葉にあるように、罪人が犠牲の動物と完全に同一視されたことを示しています。犠牲の動物はその瞬間、神の御前に本人を代表し、その人の罪を負います。

犠牲の動物は、例外もありますが（レビ1:14、15、5:8）、一般的には本人によって屠られました。この犠牲の行為は、悔い改めた罪人が置かれている罪責と疎外状態を考慮するときに、特に意義深いものとなります。罪人は契約を破ったゆえに死ぬ運命にありましたが、その死は悔い改めた罪人ではなく犠牲の動物において実現し、その命は神によって守られました。罪と刑罰は互いに切り離すことができません。一方がほかに移されることは、もう一方もほかに移されることを意味します。これは十字架上のキリストの死において実現しました。十字架において、私たちの罪はキリストに移され、キリストは私たちの身代わりとなって死なれました。

手を置いて、動物を屠ることに加えて、その血を聖所に携えてゆき、罪をそこに移す儀式がありました。ある場合には、血は聖所の内側に振りまかれたり（レビ4:6）、祭壇の四隅の角に塗られたりしました（30節）。この方法によって罪が聖所の内側に移されない場合には、罪は祭司によって移されました。そのようなときには、祭司は贖罪の献げ物の肉を食べ、自分自身で民の罪を負いました（レビ10:17）。神は悔い改めた罪人の罪の責任を負っておられました。このことは私たちのためのキリストの大祭司としての働きを指し示していました。

◆ これらの犠牲とその意味について考えてください。キリストは私たちの身代わりとなって死なれたのです。キリストの死は私たちの毎日の生き方にどんな影響を及ぼしますか。

問6 焼き尽くす献げ物の役割は何でしたか。レビ 1 : 3 ~ 9、22 : 17 ~ 22

レビ記では、焼き尽くす献げ物は贖いの犠牲の一つですが、ほかにもさまざまな役割がありました。この犠牲は祭壇で完全に焼かれ、本人のものとして受け入れられたので、主に対する全面的な献身を表していました。それはまた満願や随意的の献げ物としてもささげられました（レビ 22 : 17 ~ 22）。満願の献げ物は、ある誓願が成就した後で、主に対する感謝を表すためにささげられ、随意的の献げ物は個人的な献身や感謝、喜びの表明でした。

問7 和解（親睦）の献げ物の役割は何でしたか。レビ 7 : 12、16

和解の献げ物は感謝の献げ物、満願の献げ物、随意的の献げ物としてささげることができました（レビ 7 : 12、15、16）。このことは、犠牲をささげる行為が喜びの時であったことを暗示します（サム上 11 : 14、15、王上 8 : 62、63）。礼拝者が主の御前で犠牲の肉を親戚や友人と一緒に食べるために、主は犠牲の肉を礼拝者に返されましたが（申 12 : 17、18）、このことは、犠牲が神とほかのイスラエル人との交わりを通して契約関係を強化するものであったことを示しています（申 27 : 7、王上 8 : 63）。

問8 穀物の献げ物の役割は何でしたか。レビ 2 : 1 ~ 10

穀物の献げ物は地の産物からなり、神の民に対する神の恵みへの感謝を表していました。すべての物は神のものでしたが、神はそこごく一部を感謝の気持ちとして御自分に返すように民に要求されました（申 26 : 9、10）。穀物の献げ物には「契約の塩」がかけられていました（レビ 2 : 13）。塩は古代近東地方では保存料として用いられていたもので、契約の持つ拘束力の象徴でした（代下 13 : 5）。この献げ物は、当人が主との契約関係を自発的に保有することを表していました。

◆ 旧約聖書には、補足的な役割を持った数々の献げ物が出ていますが、新約聖書には一つの犠牲しか出てきません。このことはキリストの犠牲の性質と効力についてどんなことを暗示しますか。この唯一の犠牲からどんなことを確信することができますか。

金曜日

今週のメッセージ

11月7日

「犠牲制度そのものは、来るべき救い主を予表するものとしてキリストによって案出され、アダムに与えられた。キリストは世の罪を負って、世の贖いのために死なれるのであった。モーセを通して、キリストは犠牲の献げ物に関する具体的な指示をイスラエルの子らにお与えになった。……キリストを最もよく表す、清くて、尊い動物だけが、神への献げ物として受け入れられた」（エレン・G・ホワイト『神の息子・娘たち』225 ページ）。

「多くの人たちにとって、旧約時代にはなぜこれほど多くの犠牲の献げ物が要求されたのか、なぜこれほど多くの血を流す犠牲が祭壇にささげられたのか神秘である。しかし、人々の前に提示し、絶えず思いと心に刻むべき大いなる真理が次の言葉に示されていた。『血を流すことなしには罪の赦しはありえない』。血を流すどの犠牲にも、『世の罪を取り除く神の小羊』が予表されていた（『SDA 聖書注解』第7巻932 ページ、エレン・G・ホワイト注）。

「エデンで、蛇に向かって、『わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう』と宣告されて以来、サタンは世に対する絶対的な支配力を持つことができなことを知っていた（創世記3：15）。……非常に興味をもってサタンは、アダムとその息子たちがささげるいけにえを見守った。このような儀式の中に、彼は地と天との間のまじわりの象徴をみとめた。彼はこのまじわりをたち切ることにとりかかった。サタンは神の悪口を言い、救い主をさし示している儀式を曲解させた。人類は、自分たちが滅びるのをよろこぶおかたとして神を恐れるようになった。神の愛をあらわすはずだったいけにえが、神の怒りをなだめるためだけにささげられた」（『各時代の希望』上巻121 ページ）。

「十字架の代価——永遠の命」

イエス様が十字架の上で支払われた代価、それはご自分の命を払い、わたしたちの死を買い取る行為でした。イエス様の一方的な愛の故に、わたしたちは永遠の命を受け取っているのです（Iコリント6：20）。ゆえにこの命は自分のものではありません。生涯、主の栄光のために捧げたいと願っております。

神戸・姫路教会牧師 李 根完

寄稿メッセージ



あがな

象徴に見る贖い (2)

● 暗唱聖句 ●

「わたしたちは主のいます所に行き 御足を置かれる所に向かっ
て伏し拝もう」 (詩編 132 : 7、新共同訳)

「われらはそのすまいへ行って、その足台のもとにひれ伏そう」
(詩篇 132 : 7、口語訳)

今週の聖句

レビ記 16 章、民数記 18 : 1 ~ 8、
詩編 28 : 2、132 : 7、138 : 2

安息日午後

今週のテーマ

11月8日

イスラエルの聖所は年に1回、日ごとの犠牲によってそこに移されていたイスラエルの罪と汚れから清められました。この年ごとの儀式は、神が天の住まいから罪の問題を終わらせ、全宇宙を元の調和に回復される時を象徴的に表していました。

今週の研究では、^{しよくざいび}贖罪日の象徴的な意味について、また神の天の住まいであり、宇宙の謁見室であるイスラエルの聖所について学びます。

さらには、旧約聖書における祭司について、また天の聖所における私たちの仲保者・仲裁者キリストの働きを予表する祭司の執り成しの働きについて学びます。

日曜日

聖所と贖い

11月9日

問1 次の聖句はイスラエル人の経験と生活における聖所の役割についてどんなことを教えていますか。出 25：8、22、29：42、43、詩編 28：2、132：7、138：2

イスラエル人の犠牲制度は神の地上の住まいである聖所の内側に集中し、ここで行われました。それはイスラエルにおける生活と清めの中心でした。この独特の空間において、神は罪の問題を処理されました。神は聖所の中庭に祭壇を作るようにイスラエル人に命じられました。民の贖いをするために、この祭壇の上に犠牲の血が置かれました（レビ 17：11）。命の実体的な表れである血は神に属するものであり、命はこの祭壇の上で神に帰るのでした。

救いの計画においては、動物の命は悔い改めた罪人の命を意味し、神は罪人の代わりに無垢な動物の死を受け入れられるのでした。祭壇は神の臨在の象徴であり（詩編 43：4）、犠牲を受け入れることによって、神は罪人の罪の責任を負っておられたのでした。言い換えるなら、主はイスラエル人に次のように言っておられたのです。「もしあなたが罪を犯し、罪の束縛力から逃れようと願うのなら、それをわたしのもと、わたしの住まいに持ってきなさい。それを処理してあげよう。それをわたしのもとに持ってきなさい」。イスラエル人は主によって祝福され、主の恵みによって義とされて聖所を去りました（詩編 24：3～5、118：26）。

これらはすべて、私たちの真の大祭司であるイエスの働きを象徴するものでした。天の聖所は宇宙における神の住まいであって、神はそこから宇宙の王として支配されます。それはまた、罪の問題が処理される場所でもあります。十字架は祭壇であって、その上で私たちのために犠牲がささげられました。神は今日、私たちにこう言われます。「もしあなたが罪から解放され、罪を赦されたいと願うなら、わたしの御子があなたの罪のための代価を支払った犠牲の祭壇にきなさい」。

◆ ある人が友人に、「神がどのような方か、どうしたらわかりますか」と尋ねました。彼はこう答えました。「世の罪を負って死のうとしておられる十字架上のイエスをご覧ください」。十字架は神がどのようなお方であるかをどのように教えていますか。神についてのこの啓示は私たちにどんな慰めと希望を与えてくれますか。

問2 神殿の中で務めを果たす祭司職が必要だったのはなぜですか。

民 18 : 1 ~ 8

祭司の基本的な役割は神と民とのあいだの仲保者となることでした。祭司は教えることにおいて民の前に神を代表しました（申 33 : 10）。この役割と密接な関係にあったのが、神の導きを求める人々に神の御心を示すことでした（民 27 : 21）。祭司はまた、聖所の中で裁判官として働きました。事実、国の最高法廷は中心的な聖所において開かれました（申 17 : 8 ~ 13、21 : 5）。彼らは特に民を祝福する責任を負っていました（申 10 : 8、21 : 5）。彼らは神の前に民を代表しました。代表者としての役割を果たすときには、彼らは民と共に主の御前に出ました（出 28 : 9 ~ 12、29）。

仲保者としての彼らの役割は特に日ごとの務めにおいて顕著でした。彼らは焼き尽くす献げ物の祭壇の責任を負っていて、祭壇の上に聖なる火を絶えず燃やし続け、灰を取り除き、新しい薪^{たきぎ}を補充しました（レビ 6 : 3 ~ 6、口語訳 6 : 10 ~ 13）。彼らは朝と夕に、この祭壇の上に焼き尽くす献げ物を置きました（民 28 : 3 ~ 8）。日ごとの務めのとき、大祭司は聖所に入り、燭台を整え、主の御前に香をたきました（出 30 : 7、8）。また、イスラエル人が犠牲を携えてきたときにはいつでも、祭司はその罪人を贖うために彼に代わって犠牲をささげました（レビ 1 : 5 ~ 9、4 : 25、26、34、35）。

祭司の果たす仲保の役割は少なくとも三つのおもな目的にかなうものでした。第一に、神と人とのあいだに決定的な隔りがあるにもかかわらず、その隔りを埋める道があることを、それは暗示していました。第二に、それは御自分の民と共にいることを望まれる神の願望を啓示していました。それは、民の罪にかかわらず、民に近づく道を求められる神の愛の現れでした。第三に、イスラエル人の観点からすれば、祭司職は彼らにイスラエルの聖者に近づく道を備え、罪と汚れから清められる機会を提供してくれました。民が神に近づき、恵みと憐れみにあずかることができるように、祭司の仲保者はつねにそこにいました。

言うまでもなく、この制度全体は神と人との究極的な仲保者、主の僕、イエス・キリストを指し示していました。

◆ キリストの働きを通して、私たちは「王の系統を引く祭司」（1ペト 2 : 9）です。あなたは「祭司」として、人々のためにどんな働きができますか。

火曜日

贖罪日(1)

11月11日

贖罪日の儀式は、罪の問題が解決すること、すなわち日ごとの儀式により経験されていた救いの完成を例示していました。聖所の全体、つまり聖所と至聖所は清められねばなりません。「イスラエルの人々のすべての罪による汚れと背きのゆえに」(レビ 16:16)、それらは清めを必要としていました。これらの罪は悔い改めた罪人の携えてきた犠牲を通して神の住まいに移されてきました。贖罪日の間に、聖所はもとの清く、聖なる状態に回復されました。年に一度のこの日、地上の一角がエデンの園のように、罪と汚れのない場所となりました。年の終わりに祝われるこのエデンへの「回帰」は、イスラエルの民にとって新たな出発となりました。それは宇宙的な調和の新しい始まりを示していました(ダニ 8:14比較)。

問3 レビ記 16:16、17、21、30、33、34 を読んでください。ここに、どんなことが強調されていますか。日ごとの儀式とは対照的に、この日にはだれの罪が処理されましたか。レビ 1:1～4

これらの聖句は、清めが包括的な性質のものであることを暗示しています。なぜなら、すべての人の、すべての罪が処理されたからです。それは集団的な行為であって、イスラエルを全体として扱っていました。それは、神がその年のためにイスラエルの罪の問題を最終的に処理されることであり、終わりの時に罪が最終的に処理されることを予示していました(ヘブ 9:28)。

問4 この日、神は御自分の民に何を期待されましたか。レビ 23:26～31

贖罪日が国民全体を含む集団的な出来事であるとはいえ、各人には主に全的に献身する上で果たすべき役割がありました。この日、主にあつて安息し、主の前に苦行をしない者たちは「民の中から断たれ」ました(レビ 23:29)。いかに厳格に思われようとも、その要点は救いの業の厳粛さを強調することにあります。これらの聖句はとりわけ、忍耐して主と共に歩むことの大切さを教えています。

◆ 私たちは毎日、どのようにして「苦行」すべきですか。これは何を意味しますか。マタ 16:24、25、ロマ 6:1～13、ヘブ 12:4 参照

問5 レビ記 16：20～22 に記されているアザゼルの雄山羊の儀式を読んでください。この儀式は何について教えていますか。儀式に用いられたほかの動物とは異なり、この山羊はどうなりましたか。

「アザゼルの山羊」は救い的手段ではなく、罪と汚れを荒れ野に運ぶための輸送手段です。それはどこからわかるのでしょうか。

第一に、この動物への罪と汚れの移転は、大祭司が贖いの業を終えた後でなされています。第二に、この山羊は犠牲としてささげられていません。それは屠られていないので、贖いのための血は流されていません。第三に、人々の罪を「運ぶ・負う」とはいえ、イエスのような代理者として、あるいは身代わりとして罪を運ぶわけではありません。この動詞がほかの場所、つまり「荒れ野」(レビ 16：22) に「運ぶ」ことを意味することは文脈から明らかです。同じ動詞が主の僕イエスの働きについて用いられるときには、「多くの人の過ちを担い」という意味になります(イザ 53：12)。イエスは人々の罪を運ぶのではなく、自ら罪の責任を負い、それによって私たちを赦されるのです。これが贖いであり、アザゼルの山羊と異なるところです。

アザゼルの山羊の儀式は、いわば除去のための儀式です。言い換えるなら、アザゼルの山羊はイスラエルの宿営から、あつてはならないもの、つまり罪と汚れを除去する、あるいは取り除く手段です。

贖罪日の間、主ともう一つの勢力との間に対決がありました。主のための山羊は神を代表しており、アザゼルのための山羊は反対勢力、悪魔、罪と汚れの根源を代表していました。人々の罪を山羊によってアザゼルのもとに送ることによって、この勢力は罪の創始者と呼ばれていました。神は御自分の民を贖い、その罪を赦すために、彼らの罪と汚れを受け入れられましたが、だからといって神は悪の創始者であったわけではありません。贖罪日は、神聖と清めが罪と汚れ、悪の勢力に対して最終的に勝利することを象徴的に宣言していました。贖罪日は、ルシファーが天で起こした告発が完全なかたちで終結し、ルシファーが罪をもたらしたことに対する責任を負う瞬間を予期していました。神はこの儀式を通して、キリストの力によって、死と苦しみから解放され、罪の力からも解放された、新しい被造物が出現する将来を指し示すことによって(黙 21：3、4)、御自分の民に希望を注いでおられたのでした。

木曜日

贖いとは何か

11月13日

問6 次の聖句に出てくる「贖う」という動詞はどんな思想を連想させますか。レビ4：31、16：18、19、30、17：11

レビ記においては、祭司が仲保者として贖いの儀式を執り行いますが、彼らが罪を贖うわけではありません。儀式が完了した後で、神は赦しをお与えになります（レビ4：26——受動態の動詞は、神が赦しをお与えになる方であることを暗示）。贖いは神が御自分の民のためになされる行為です。神は「その土地と民を贖う」お方です（申32：43、新国際訳——詩編65：4、79：9参照）。贖いを通して、神は御自分の愛を罪人に注がれます。

レビ記で「贖う」と訳されているヘブライ語動詞（キッペル）は、ぬぐう、取り去るという思想を表します。贖いは幕屋、祭壇、祭壇の角に対してなされ、それらが罪と不浄の汚れから清められたことを意味していました。さらに、それらが贖いによって汚れのない、もとの状態に回復されたことを示唆していました。悔い改めた罪人に適用されるときには、この動詞は同じく罪と汚れから清められることを意味しています。

清めは犠牲の動物の血によってなされるので、贖いにはまた身代金を払って受け戻すという思想も含まれています。人を罪から解放することは、犠牲の動物の血・命という代価を払ってなされました（レビ17：11）。犠牲の動物は罪人の身代わりにささげられたので、それは身代金を払って罪人の命を受け戻したことになります（マタ20：28、1テモ2：6参照）。

贖うという動詞はまた、レビ記の中でさまざまな儀式に関連して用いられていることから、それがたった一つの行為を意味するものでないことは明らかです。つまり、贖いはある時点における出来事というよりも、むしろ一つの過程を意味します。年間を通してなされる聖所の活動の全体、つまり日ごとの犠牲（レビ5：10）から贖罪日（16：34）、そしてそれらの間におけるすべての儀式が贖いとして理解されていました。言い換えるなら、贖いとは、犠牲の行為、祭司の執り成し、贖罪日における罪と汚れの最終的な処理を含めて、年間を通してイスラエルのためになされた神による清めの行為の全体をさすものでした。このようにして、キリストが私たちのために行っておられる贖いの業の包括的な性質が予表されていたのでした。

◆ 神だけが罪を贖うことができました。しかし、それにはキリストの命が必要でした。このことは罪の重大さについて何を教えていますか。

「サタンは罪の創始者であり、神のみ子の死を招いたあらゆる罪の直接の扇動者であるから、正義は、サタンが最後の刑罰を受けることを要求する。人間を贖い、宇宙を罪からきよめるキリストのみわざは、天の聖所から罪を取り除いて、これらの罪をサタンの上に置き、サタンが最後の刑罰を負うことによって閉じられる。そのように、象徴的奉仕においても1年間の務めは聖所のきよめと、アザゼルのやぎの頭の上に罪を言いあらわす告白をもって閉じられた」（『人類のあけぼの』上巻 423 ページ）。

「血と命は語彙ごいの上で一对のものと考えられていて、……ヘブライ語では意味の上で対応するものと理解されていた。この密接な関係のゆえに、血は命の源と見なされている。血は命を表すゆえに（創9：4、申12：23）、血は命を償うことができる。被造物の命は血にあるので、血は人の命を贖うのである。一人の命はもう一人の命のために犠牲とされる。祭壇の上で身代わりの血が流されることによって、贖いがなされる。罪のない犠牲の血が罪を犯した者の命のためにさげられたからである」（マーク・F・ルーカス『ニュー・アメリカン・コメンタリー』3A、レビ記、236 ページ、2000年）。

「比類なき贖いあがなの賜物」

理性を失った人間によって繰り返される残虐な事件が後を絶ちません。罪は恐るべき力で人の心を支配しています。罪は欲望だけを栄養にするのではなく、絶望をも栄養として増殖します。例えば夫からの暴力に絶えかね、殺し屋に殺人を依頼するなどです。しかし絶望は事故などによって突然襲ってくる場合があります。ある父親は息子が起こした事故の賠償金を払うため、複数のサラ金から借金をしました。しかし返済額は減らず、心労から自殺を考えます。そのような時、相談窓口を知り相談したところ、過払い金数百万円が戻り、父親は一命を取りとめたのでした。

罪は人の生きる力をも奪おうとします。このような恐るべき力から私たちを救い出すために神がとられた究極の方法、それが「贖罪」です。キリストは返済不能と思われた負債を、身代わりによって帳消しにしてくださいました。これほど嬉しいことはありません。絶望に変えて、赦しの希望を与えてくださったのです。私たちを救うのは、比類なき「赦し」の体験です。この恵みへの感謝によってはじめて、私たちは罪の縄目から解き放たれるのです。

大岡山・世田谷教会牧師 柴田 寛

— 寄稿メッセージ —

第8課

11月22日



女から生まれる——^{あがな}贖いと受肉

●暗唱聖句●

「あなたがたも知っているように、御子は罪を除くために現れました。御子には罪がありません」（ヨハネ1・3：5、新共同訳）

「あなたがたが知っているとおりに、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪がない」（ヨハネ第1・3：5、口語訳）

今週の聖句

マタイ1：18～25、3：13～17、4：1～11、9：35、
マルコ1：12、13、ヨハネ1：1、2、14、
コロサイ2：9、ヘブライ1：3

安息日午後

今週のテーマ

11月15日

科学者も認めているように、宇宙はどれほど探究しても神秘で満ちています。聖書もまた、神秘で満ちています。中でも、私たちの救いのための神の御業は最大の神秘です。

今週は、その御業の中心的なテーマの一つ、おそらく宇宙の中でも最大の神秘であろうと思われる神の御子の受肉について考えます。驚かされることは、創造主が被造物となるために罪と死の世界に下られたということです。そのようなことがどうして可能なのでしょうか。三位一体の神だけがご存知です。私たちにわかることはただ一つ、もし受肉がなければ、罪の赦しも神との和解もなかったということです。神の御子の受肉は人類の救いのための神の計画に欠かせない要素でした。

特別な子を産むと告げられたとき、マリアは驚きのあまり、次のように答えました。「どうして、そのようなことがありえましようか。わたしは男の人を知りませんのに」。「天使は答えた、『聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む』(ルカ 1:34、35)。この子は聖霊の創造力を通してマリアの胎内に宿ったのでした(マタ 1:18)。「包む」という動詞は出エジプト記 40:35 を思い起こさせます。ここに、雲の上の主の栄光が幕屋の民と共に住むために降ってくる光景が描かれています。主はマリアの胎内に宿るために神秘的な方法で降ってようとしておられました。

イエスが人となられることは、まさに神的なものとなることが一つになることでした。二つの性質は明らかに認められますが、それは単に神的なものが人的なものの中に宿ったということではなく、実際の受肉が起こったのでした。つまり、キリストは真に神であり、真に人であるということです。二つの性質がマリアの胎内で結合したとき、どんなことが起こったのか、聖書は明らかにしていません。キリストの受肉において神は人となり、満ちあふれる神性が人のうちに宿ったのでした。これがパウロの言っていることにほかなりません。

問 1 コロサイ 2:9 の聖句は、イエスについて何と述べていますか。

要点は、イエスが完全に神であられたということです。もしキリストの受肉において神の属性の一つでも失われていたなら、それは決して神の受肉とは言えなかったでしょう。パウロによれば、受肉以前のキリストは「神の身分」(フィリ 2:6)、神と同等でしたが、受肉において、「僕の身分になり、人間と同じ者になりました」(7 節)。

イエスは完全に神でしたが、持てるすべてのものを父なる神の権威のもとに置かれました。しかし、それによって御自分の神としての属性を捨てられたのではありません。受肉において、イエスの神性は隠されましたが、神格はつねに完全に存在しました。贖いの目的のためには、神が人となることが不可欠でした。なぜなら、神だけが人を救うことができるからです。

◆ マタイ 1:18～25 には、神の超自然的な介入としか考えられないような奇跡が起こっていますか。理解できないという理由だけで、何かを自動的に虚偽として退けるべきでしょうか。

月曜日

神と人間の再結合

11月17日

問2 キリストが神であり、同時に人であられたことに関して、どんな証拠をあげることができますか。マタ 26：38、ルカ 2：40、ガラ 4：4

古代ギリシアの哲学では、人間の肉は本質的に悪であり、魂の牢獄であると考えられていました。この見解に従って初期のクリスチャンの中には、神の御子が物理的な肉体を持って来られたのではなく、単にそのように見えただけであると考えた人たちがいます。しかし、新約聖書にあるように、イエスが真の人間であられたことは議論の余地がありません。イエスは女から生まれ、子供として成長し、従順を学び（ヘブ 5：8）、苦しみ、死なれました（マタ 26：38、ルカ 23：46）。聖書はまた、イエスが聖なるお方、人となられた神であると述べています（ヨハ 1：1、2、14、ヘブ 1：3）。人と神がキリストにおいて一つになることは贖いに欠かせないことです。

なぜでしょうか。墮落後、アダムとエバ、そしてそのすべての子孫は神から離れ、その存続が危うくなったからです。人間は自分では神との再結合ができなくなったために、主が主導権をとり、受肉、つまり神が人となることによって、自ら人間とひとつになられたからです。キリストは、神と人が永遠の再結合において交差する「場」となりました。キリストの受肉において、「神性と人性が神秘的に結合し、人と神が一つとなった」（エレン・G・ホホワイト『サインズ・オブ・ザ・タイムズ』7月30日、1896年）。この結合は初めに神と人との間にあった結合よりも深いものでした。

問3 パウロはイエスについて何と言っていますか（I コリ 15：45）。これは何を意味しますか。

イエスのうちに人類のための新しい始まり、神に結ばれた「新しい」人類がありました。イエスは創造主であり、新しい人類の頭^{かしら}でした。彼は新しいアダムであって、彼から新しい人類が生まれようとしていました。イエスの外にあるのは、今も昔も、古い人類、アダムにおいて墮落した人類、神から離れ、滅びる運命にある人類です（I コリ 15：22）。この人類の唯一の希望は受肉した神でした。この方のうちに神と人が永遠の愛のきずなによって結ばれていました。キリストを通して、望む者はひとり残らず、神との完全な調和に導かれます。

問4 マタイ3：13～17を読んでください。ヨハネによるイエスのバプテスマの物語から、どんな重要な真理を学ぶことができますか。

キリストのバプテスマはきわめて重要な意味を持っていました。第一に、イエスはバプテスマを要求することによって、御自分を罪人と同一視されました。バプテスマを受ける必要のなかったイエスがそれを要求されたのは、御自分のためではなく、私たちのため、私たちの利益のためでした。イエスはそれによって御自分に従う者たちのために模範を示されたのでした。しかし、イエスのバプテスマは模範以上のものでした。それは、私たちが自分のバプテスマを通してイエスにつながり、ヨハネによるイエスのバプテスマの祝福にあずかるのを可能としました。

第二に、イエスは水からあがると、ひざまずき、父なる神に祈られました（ルカ3：21、22）。聖書はこの祈りの内容について記していませんが、父なる神の応答が手がかりを与えてくれます。神は、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（22節）と宣言することによって、イエスに祈りが聞かれたことを告げておられたのでした。「それらは私たち一人ひとりにとって希望と憐れみの言葉であった。神が人のためにしてくださった備えに対する信仰を通して、あなたは『愛する子』イエスにおいて受け入れられ、イエスの功績を通して受け入れられているのである」（エレン・G・ホワイト『バイブル・エコー・アンド・サインズ・オブ・ザ・タイムズ』11月12日、1894年）。

問5 上記のエレン・ホワイトの言葉にはどんな希望がありますか。

第三に、イエスのバプテスマには三位一体の神がかかわっておられました。父なる神は天から語りかけ、聖霊は鳩の象徴によって目に見えるかたちで御自身を啓示されました。神の愛は人類の一員としての御子に注がれ、御子を人類の代表として受け入れていました。人間はもはや神の愛から切り離されてはいませんでした。なぜなら、キリストにおいて神の愛が人間に注がれる道が開かれたからです。

◆ 今日の研究は、神が墮落した私たちをも受け入れてくださることについてどんな重要なことを教えていますか。

水曜日

イエスの誘惑

11月19日

問6 イエスがバプテスマの後、荒れ野で経験された三つの誘惑について要約してください。マタ4：1～11、マコ1：12、13

イエスが経験された誘惑はアダムとエバのそれとは対照的でした。第一に、アダムは罪の墮落的な現実のないエデンの園で誘惑されましたが、イエスの場合は悪の勢力のもとにある荒れ野においてでした。第二に、アダムには豊かな食物があり、イエスは食物に飢えていました。第三に、アダムは断食せず、イエスは断食しておられました。第四に、アダムもイエスも御心に背いて食欲を満たす誘惑を受けました。アダムは誘惑に屈し、イエスは屈しませんでした。第五に、アダムは神の言葉を疑うように誘惑され、それへの信頼を失いました。イエスも神の言葉の真実性を疑うように誘惑されましたが、誘惑を拒否されました。第六に、アダムは公然と主に背き、サタンと共に神の統治に反逆しました。イエスはサタンから、もし自分を拝み、神の国に対する戦いに加担するならば、この世の王国を与える、と言われました。しかし、イエスは父なる神に対する忠誠を守られました。

イエスは、アダムが失敗した根本的な点でサタンに勝利することによって、アダムの失敗を元に戻し、御自分を信じる人々に御自分の勝利を与えておられました。古い人類はアダムから不従順と反逆の精神を受けましたが、新しい人類が人類の頭から受けるのは不従順と反逆の精神ではなく、神の御心に対する謙遜な服従という精神です。

問7 コリントIIの5：21に照らすと、主があらゆる罪に勝利されたことは私たちにとって、また、贖いの過程にとってどういう意味があるのでしょうか。

父なる神と御子とのあいだの強いきずなは、御子に対するサタンの誘惑や攻撃によっても断たれることはありませんでした。御子はあらゆる誘惑に勝利し、父なる神に完全に服従されました。イエスに比べられる人間は過去にも、現在にも、将来にもいません。イエスは生まれながら、また個人的な選択によって罪のないお方でした。イエスが私たちを救うことがおできになる根拠はここにあります。罪のないお方が私たちのために罪となられたのは、私たちが信仰によって自分のものでなくイエスのものであった義を受けるためです。完全な犠牲の小羊イエスがその身に私たちの罪を負われたのは、私たちを創造主との一致と調和に回復するためでした。

「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた」（マタ 9：35）。

イエスはいやしの働きを通して、苦しむ人類に入り込んできた死に勝利しておられました。イエスが将来、死の王国そのものに勝利されることは、日ごとのいやしの働きのうちに予告されていました。罪によって世界に入り込んだ死の力は滅ぼされつつありました。このことは、たとえば4日も死んでいた者の復活を含むさまざまな復活の事例のうちに例示されていました（マコ 5：35～43、ルカ 7：11～17、ヨハ 11：38～44）。

イエスの奇跡はまた、社会的な障壁を取り除くのに役立ちました。重い皮膚病を患っている人はイエスに受け入れられ（マコ 1：41）、サマリア人は戻ってきてイエスに感謝を述べています（ルカ 17：11～17）。イエスはまた、シリア・フェニキアの女のもとに行き、彼女の娘をいやしておられます（マコ 7：29、30）。罪によって生じた人間同士の疎外感はいエスの和解の働きによって取り除かれつつありました。イエスは互いに和解した新しい人類を創造しておられました。

しかし、イエスの奇跡はまた、人間を父なる神との調和と交わりに回復するのに役立ちました。死の力に対するイエスの勝利はしばしば、人々をイエスへの信仰に導きました（ヨハ 4：53、20：30、31）。

問8 イエスはほかにどんな方法を用いて、社会における、また神に対する調和を回復されましたか。マコ 2：15～17、ヨハ 4：39～42

神と人とを隔てていた淵はいエス御自身の人格、つまり人であり、神である救い主によってだけでなく、キリストの救いの言葉の力によっても埋められました。「^{ことば}言は、自分を受け入れた人……には神の子となる資格を与えた」（ヨハ 1：12）。これらの人たちは肉の意思によってではなく、神の意思によって生まれたのでした（13節）。イエスは御自身を通して神に和解した新しい人類を集めておられました。

◆ あなたの人間関係を振り返り、次のように自問してください。「実地的な意味において、私の神との和解は人々に対する私の態度にどのように反映されているだろうか」。

金曜日

今週のメッセージ

11月21日

受肉の目的 「キリストは父なる神との協議によって、地上における御自分の生涯に対する計画をお立てになった。……彼は人類家族の頭として立つために、人性の衣をもって神性を覆われた。キリストの人性には、アダムの不従順のゆえに墮落した人類の人性が交じっていた」（エレン・G・ホワイト『サザン・ワーク』85 ページ）。

「キリストの働きは御自分の人性を通して人を神と和解させることであり、御自分の神性を通して神を人と和解させることであった」（エレン・G・ホワイト『対決』38 ページ）。

バプテスマにおける祈り 「イエスはヨハネの手によってバプテスマを受け、水からあがるとヨルダンの岸辺にひざまずいて、神に祈りをささげられた。……イエスは人類の代表として神に受け入れられた。あらゆる罪と弱さを持った私たちは価値のない者として捨てられたのではない。私たちは愛する子イエスにおいて受け入れられている。なぜなら、天は神の御子を通して私たちの嘆願に対して開かれているからである。門は少し開かれていて、義の太陽イエスの輝きの輪の中に来ようとしさえすれば、天の光はイエスが救うために来られたすべての者の上に輝くのである」（エレン・G・ホワイト『サイズズ・オブ・ザ・タイムズ』7月28日、1890年）。

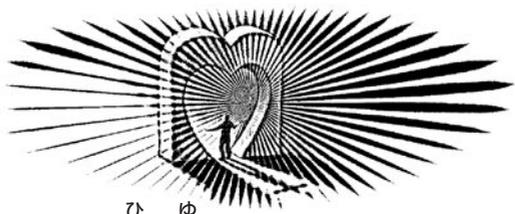
「常に共にいてくださる愛の神」

ダニエル書の中に、ベルシャザル王に対する神の宣告を、ダニエルが解き明かす場面があります。「神があなたの治世を数えて、これをその終わりにいたらせたこと。……あなたがはかりで量られて、その量の足りないことがあらわれたことをいうのです」と。私はこの言葉の前にたじろぎ、神の前に自分がどんな者であるかを知らされた思いでした。

神はその後、自己中心でかたくなな私の罪を次々に示されました。「今、イエス様に救っていただかなくては、滅びてしまう」。そんな思いが迫り、真剣に祈りました。このとき私は、イエス・キリストの十字架が、私の罪の赦しのためであったことを知らされたのです。それは不思議な体験でした。主は、傍観者として立っていた私を自覚させ、主に贖われなければ滅びてしまう者であることを悟らせてくださったのです。主は十字架の死をもって私を贖い、ご自身との関係の中に招き入れてくださいました。今、常に共にいてくださる愛の主に、心から感謝し、賛美をささげます。

浦和・赤城・大胡教会牧師 荒井民子

寄稿メッセージ



ひ ゆ 救いの比喩

● 暗唱聖句 ●

「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです」(ローマ 3:25、新共同訳)

「神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、それは、今の時に神の義を示すためであった」
(ローマ 3:25、26 上句、口語訳)

今週の聖句

ローマ 3:19～26、コリント II・5:18～21、
ヨハネ I・4:7～11

安息日午後

今週のテーマ

11月22日

どんな一つ概念も、思想も、キリストの死の意味を完全に把握するには十分とは言えません。キリストの死は私たちを悪の勢力から解放するために支払われた身代金であった、と言う人たちがいます。それは神の愛についての最高の啓示であって、私たちが造り変えるものである、と言う人たちがいます。それはなだめの犠牲であって、私たちと神とを隔てる罪を取り除くものであった、と言う人たちがいます。それは和解の行為であった、と言う人たちがいます。それは無罪放免の宣言であった、と言う人たちがいます。

本当のところは、キリストの死はこれらすべて、いやそれ以上のものでした。中には、たとえば犠牲の身代わりといった中心的な概念もないわけではありませんが、キリストの死の意味を一つの包括的な概念によって把握することは不可能です。

今週は、十字架上のイエスの死を通して与えられている素晴らしい賜物を表すのに用いられている中心的な概念について学びます。

日曜日

あがな
贖い

11月23日

問1 マルコ10：45、ガラテヤ3：13、エフェソ1：7、ペトロⅠの1：18、19の聖句から「贖い」の概念についてどんなことがわかりますか。

贖いとは身代金を支払うことによって負債や隷属から解放されることであって、キリストの死を解釈するために新約聖書の中で用いられている概念です。この考え方によれば、全世界は罪の囚人であり、律法は門番でした（ガラ3：22、23）。罪の奴隷として、人間は永遠の死に向かって進んでいました（ロマ6：6、23）。その負債は自らの命を捨てることによってのみ支払われるのでした。そのとき、キリストが来て、私たちの贖いのための代価を支払い、彼を信じるすべての人に命を与えてくださいました。彼らは、「かつては罪の奴隷でしたが」、今や「罪から解放され、義に仕えるようになりました」（ロマ6：17、18）。

キリストはまた、私たちを「律法の呪い」（ガラ3：13）から贖ってくださいました。律法の呪いは律法を犯した者の命を要求しました（10節）。律法そのものは私たちを死の宣告から救うことができませんでした。なぜなら、それは私たちを生かすことができなかつたからです（21節）。それはただ犯罪者に死を求める法的な根拠を与えただけでした。しかし、「神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした」（ガラ4：4、5）。

キリストはまた、「わたしたちをあらゆる不法から贖い出し、良い行いに熱心な民を御自分のものとして清め」てくださいました（テト2：14）。したがって、贖いは私たちの生き方が清められる過程を含みます。これは、キリストが十字架上で私たちの負債を支払い、罪の赦しを与え（エフェ1：7）、義認の賜物を与えてくださった（ロマ3：24）ことを前提としています。言い換えるなら、キリストが私たちのために買ってくださった賜物（罪の赦し）を通して罪の宣告から解放され、私たちはキリストを信じる信仰によって義とされたのでした。

神は罪が全く存在しなかつたふりをすることによって、罪を無視することはおできになりませんでした。神は自ら身代金を支払うことによって、御自身の道徳的要求を満足させられました。神は人類と地球が存在する権利を買い戻されました。人間がそのことを認めるか否かにかかわらず、私たちはみな神のものでした。

問2 コリント II の 5 : 18 ~ 21 を注意深く読んでください。和解について何と書かれていますか。

和解とは、かつて敵対していた個人や集団の間に平和的な関係を回復することです。ふつう、仲介者や交渉者が必要となります。パウロはこの慣行を用いてイエスの十字架を説明しています。

第一に、神のほうから、罪人を御自分に和解させてくださいました。つまり、私たちの罪にもかかわらず、神はなおも私たちを愛してくださいました。

第二に、神は仲保者を用いて和解を可能としてくださいました。「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ」(II コリ 5 : 18)。「神はキリストによって世を御自分と和解させ」(19 節)。このことは、神と人間との隔たりが仲保者を必要とするほど大きかったことを暗示しています。

第三に、和解の対象が「わたしたち」また「世」と明示されています。「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ」(II コリ 5 : 18)。動詞は過去形で、その行為が完了していることを示しています。このことは、信者が今、和解の祝福と豊かさにあずかっていることを意味します。世については、「神はキリストによって世を御自分と和解させ [ておられた]」(19 節、新国際訳)となっています。このことは、世の和解がなおも進行中であることを暗示します。信者の場合とは異なり、それは完了した出来事ではありません。

第四に、一過程としての和解は神の二つの行為によって構成されています。一つは、「人々の罪の責任を問うことなく」(19 節)とあるように、十字架上の神の和解の行為です。罪は、神が人間を御自分に和解させることを不可能にしていた障壁でした。この意味で、私たちは生まれながらにして神の怒りの対象でした。しかし、神は罪の障壁を取り除くことによって、御自分の愛を私たちに豊かに注ぐことを決断してくださいました。神の視点からすれば、和解とはこの障壁を取り除くことです。もう一つの和解の側面は、和解の奉仕 (18 節)、つまり私たちにゆだねられた和解の言葉を宣べ伝えることです (19 節)。「わたしたちはキリストの使者」です (20 節)。神御自身が、「わたしたちを通して勧めておられるので……神と和解させていただきなさい」(20 節)。この奉仕を通して和解は本来の目的を達成し、神に対する人間の敵意は取り去られるのです。

火曜日

義 認

11月25日

義認とは、基本的に、罪を犯した人が法廷で無実とされ、無罪放免となることをさす法律用語です。この概念はまた新約聖書の中で十字架の意味を説明するのに用いられてきました。

問3 パウロは信仰による義認を律法への服従と対比しています。このことは義認を理解する上でどんな助けになりますか。ロマ3：19～24

これらの聖句から、以下のことが明らかになります。第一に、法的な言葉は、人間が罪に問われていることを暗示します。ここで、人間は告発通り有罪とされています。つまり、人間はみな律法による有罪宣告のもとにあります（ロマ2章）。

第二に、神は人間に窮地から逃れる道を備えてくださいました。「ところが今や」、キリストの到来とともに、「律法とは関係なく」、つまり私たちの律法への服従によらないで、「神の義が示されました」（ロマ3：21）。パウロによれば、それは「イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です」（22節）。ここで言われている義とは、単に神が無罪を宣言してくださることだけでなく、私たちが信仰によってキリストによる神の救いの御業にあずかることをも意味しています。

第三に、この義認はユダヤ人にも異邦人にも提供されています（ロマ3：22、29）。神は人間を差別されません。人はみな罪人であって、ひとしく「神の恵みにより無償で義とされるのです」（24節）。したがって、人間を窮地から救うものは信仰によってすべての人に与えられる義認です。この救いの賜物は、新しい命に生きる力を私たちに与えてくださる聖霊の授与を伴います（ガラ3：2、3、ロマ6：4）。

第四に、神の決定はキリストの贖いの業によって正当とされます。ここに、贖いと義認という二つの概念が一つになっていて、それがキリストの義を受け入れる人々を義とする神の決定に法的基礎を与えています（ロマ4：3～6）。キリストが私たちの罪を負って、私たちの代わりに死なれたゆえに、神は想像を絶することを成し遂げることがおできになるのです（II コリ5：21）。

◆ ローマ3：19～24を読み、書かれていることをあなた自身に当てはめてください。それは、あなたが神と和解する上でどんな助けになりますか。

問4 ローマ3：25、26の中で、キリストの犠牲によって達成されたことについて、パウロは何と述べていますか。

キリストの死を表すのに、特に「犠牲」（新国際訳——欽定訳では「償い」という言葉が用いられていますが、これは象徴的、比喩的な意味ではなく、実際に起きたことを表しています。キリストは私たちのために御自身を犠牲としてささげられたのです。旧約聖書の犠牲は、私たちのための神の御業の中心である、この真正な犠牲の反映にすぎませんでした。

第一に、この犠牲は私たちと神との関係を回復するために神御自身によって備えられました（ロマ3：25）。私たちにできなかったことを、神は御子によって成し遂げてくださいました。第二に、これは身代わりの行為で、何の罪も欠点もない方が、贖罪の献げ物としてささげられました（ロマ8：3、IIコリ5：21）。彼は十字架の上で私たちの罪を負い、私たちに代わって死なれました（Iペト2：21～24）。キリストは私たちの罪をその身に負うて、私たちを罪から清め、神との一致に回復してくださいました。

第三に、キリストの犠牲は私たちを神の怒りから解放したという意味において償いです。パウロはローマ1～3章の中で、世が罪のもとにあり、法的には神の有罪宣告のもとにあることを論証した後で、キリストの犠牲を紹介します。神の怒りは人間の不義と墮落に対して表されていました（ロマ1：18）。キリストの犠牲を通して、私たちはこの怒りから解放され、神の愛が私たちに注がれました。償いとは、キリストが私たちを愛するように父なる神を説得した、というのではなく、むしろ、キリストの犠牲のゆえに、神の愛が私たちに注がれるようになったという意味です。キリストは、私たちが経験しなくてもすむように、罪に対する神の怒りを経験されました。この意味で、十字架は神の愛が啓示される場であるばかりでなく、罪に対する神の怒りが現された場でもあるのです。

第四に、キリストの犠牲は私たちを救うための神の御心の法的根拠を表現し実現し、提供します。私たちの贖いと和解はキリストの犠牲の血なくしてはありえません（使徒20：28、コロ1：20、黙5：9）。神がキリストを信じる人々を義とすることがおできになるのは、唯一の犠牲の供え物としての、十字架上のキリストの死のゆえです（ロマ5：9）。神はキリストにおいて罪を処罰することによって、御自分が正しい方であって、キリストを信じる人々を義とすることができることを明らかにされたのでした（ロマ3：26）。

木曜日

神の愛の現れ

11月27日

救いの計画を生み出し、それを実行に移した原動力は神の本質そのものである神の愛でした（Iヨハ4：8）。神の贖いの業に現れたあらゆる側面は神の愛の基盤の中に組み込まれていました。神が私たちに代わって死ぬために御子を遣わされたのは、この世を愛しておられたからです（ヨハ3：16）。御子が私たちに代わって死ぬために世に来られたのは、父なる神（ヨハ14：31）と私たち（13：1）を愛しておられたからです。信仰によってキリストに結ばれている人々は神（ヤコ2：5）とイエス（ヨハ14：21）を愛し、互いに（Iヨハ3：11）愛し合います。事実、神の戒めに従う生き方は、キリストが私たちのためにしてくださったことに対する私たちの愛の現れです（Iヨハ5：3）。キリストの生涯と死は最も崇高な愛の啓示である神の品性の壮大な現れでした。

問5 キリストの死において現された神の愛を、私たちはどのように受けとめるべきですか。Iヨハ4：7～11

キリストの犠牲に啓示された神の愛の重要性は、宇宙の大争闘に照らして考えるときによく理解できます。神に対するサタンの告発は天の住民の心に神の性質に関する疑問を投げかけました。神は自ら主張するように、確かに愛に満ちた、自己犠牲の神であられたのか、それとも自己犠牲という美名のもとに利己的な品性を隠しておられたのか。キリストの十字架は神の品性に関するあらゆる疑いを永遠にぬぐい去りました。創造主が救いに値しない人類を救うために自発的に人となり、苦しみ、十字架の上で死なれたことは、神の愛が天の住民の理解をはるかに超越したものであったことを示していました。この測りがたい犠牲が無私の性質のものであったことは、キリストによる神の御業が御自分の利益や利得のためでなく、他者の利益のためであったことのうちにはっきりと示されています。

キリストの十字架に現された神の愛はまた、神の性質に関する人間の誤解をぬぐい去るのに役立ちました。「イエスを、父なる神をあらわすお方として示す時、イエス・キリストにあらわされた神のあわれみと、言い尽くすことのできない愛を見ることができないようにサタンが私たちの道に投げかけた影を追い払うことができるのです。カルバリーの十字架をごらんください。それは、天父の限りない愛と、測り知ることのできない慈しみの、動くことのない保証なのです」（『セレクトッド・メッセージ1』207ページ）。

和解 「和解とは、魂と神との間にあるすべての障壁が取り除かれること、また罪人が神の赦しの愛の意味を理解することを意味する。キリストが墮落した人間のために払われた犠牲のゆえに、神はキリストの功績を受け入れる違反者を正当に赦すことができになる。キリストは、憐れみと愛、義が神の心から罪人の心に流れる経路であった」(『セレクトッド・メッセージズ』第1巻 396 ページ)。

神の怒り 「キリストは本来なら人間の上にくだるべき神の怒りを受けられるのであった。彼は人間のために避難所とられた。人間はまさに犯罪者であって、神の怒りを受けるべき存在であったが、キリストを信じる信仰によって、備えられた避難所に逃れ、安全に守られるのであった。死の中にあっても、もし人が受け入れるなら、命があった」(エレン・G・ホワイト『レビュー・アンド・ヘラルド』2月24日、1874年)。

「十字架を見上げて生きる」

イエス様が十字架に付けられて死んだというのは、本当の出来事です。でもそれは今から見れば遠い昔の、遠い外国で起こったことです。それなのに神様が、ここに生きている私たちにしてくださっているのはこういうことです。「目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿ではっきり示されたではないか」(ガラテヤ3:1)。

私たちは、十字架に付けられたイエス様の姿を、はっきりと目の前に見せられたら何を感じるのでしょうか。みなさんはどうだったでしょうか。私の場合、愛そのもの、そして私を愛してくださっている方との交わりなのでしょう。交わりは愛の表れですね。「愛の反対は無関心(つまり交わりを絶つ)」とも言われていますから。

そこで「贖い」「和解」「義認」「償い」「犠牲」……と、言葉だけ聞いて(読んで)いると、「聖書の言葉ってなんか難しいなあ」と思うことがあります。でも「イエス様が私のために十字架で死んでくださった」というのは、難しいとか簡単とかいうことではないですね。だから聞くと難しそう言葉は、十字架のイエス様を見ながら聞くといいわけです。そのときにその言葉は、神様が私たちを愛してくださっている愛と、その愛の交わりを私たちに示してくれますから。私たちの神様に、栄光が世々限りなくありますように。

富山・金沢教会牧師 中野陽司

— 寄稿メッセージ —



あがな

十字架における贖い

●暗唱聖句●

「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです」

(コロサイ 1:13、14、新共同訳)

「神は、わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった。わたしたちは、この御子によってあがない、すなわち、罪のゆるしを受けているのである」

(コロサイ 1:13、14、口語訳)

今週の聖句

マタイ 26:37、38、27:46、マルコ 14:33、34、
ルカ 22:40～44、ヨハネ 19:28～30

安息日午後

今週のテーマ

11月29日

自分が肥満になったこと、またそのために健康を損なったのは、週に4、5回、ファスト・フードの店で食事をするせいであると言って、ある男がファスト・フードの会社を訴えました。彼は自分の問題を自分自身でなく、会社のせいにしたのでした。

私たちも同じように、自分の過ちを他人のせいにする傾向があります。しかし、神は言い訳を受け入れられません。神は私たち一人ひとりに自分の罪の責任を求められます。しかしながら、贖いの素晴らしさがその本領を発揮するのはここにおいてです。もし私たちが自分の罪の責任を負い、心からイエスを信じるなら、神は喜んで私たちの罪を赦してくださいます。私たちは自分の責任を認めるとき、反逆に対する刑罰を免れます。その刑罰はどうなるのでしょうか。神はそれを見過ごしにされませんでした。それどころか、神はこの刑罰をイエスに負わせられたのです。今週は、私たちに代わって刑罰を受けられたキリストの経験について学びます。

問1 マタイ 26：37、38、マルコ 14：33、34 を読んでください。イエスはゲッセマネでどんな経験をしておられましたか。

イエスは御自分が数時間後に直面することをよく知っておられました。その経験は極度の苦痛と不安に満ちたものでした。ゲッセマネに着くと同時に、イエスはもはや自分の感情を抑えることができなくなり、それをペトロ、ヤコブ、ヨハネに打ち明けられます（マタ 26：37、38、マコ 14：33、34）。イエスが語られた言葉は非常に重要です。

「イエスはひどく恐れてもだえ始め」（マコ 14：33）。「ひどく恐れて」と訳されているギリシア語の“エクサンベオ”は困惑や驚き、混乱によって生じる強い興奮状態を表します。これにはしばしば、恐れと脅威、おののきともありません。マタイが用いている動詞“ルペオ”（「悲しみもだえ」——マタ 26：37）は極度の苦悩や悲しみ、不安を表します。マルコ 14:33 にある二番目の動詞「もだえ」（“アデモネオ”）は、よりはっきりと不安や苦悩、恐れのおののきを表しています。イエスの感情的、肉体的状態は計り知れない不安と興奮状態に陥っていました。それまでイエスのうちに見られた平安は消え去り、代わりに恐れとおののき、不安が支配していました。イエスがゲッセマネに着いたときにそのように感じ「始めた」と、マルコが記していることに注意してください。この感情的混乱はさらにひどくなります。

このイエスの肉体的、感情的状態について特別な理由はあげられていませんが、新約聖書の光に照らして考えるなら、それは人間から受ける苦しみによるものではなく、世の罪を負われることの結果であったと結論づけることができます。

「わたしは死ぬばかりに悲しい」（マコ 14：34）。イエス御自身、御自分の状態を弟子たちにこのように説明しておられます〔英語聖書では、「わたし」は「わたしの魂」となっていて、「わたし自身」を強調し、またはイエスの経験の包括性を示していると思われる〕。「死ぬばかりに悲しい」と訳されているギリシア語の“ペリルポス”はふつう、その強さと深さにおいて測りがたい悲しみや苦しみを表します。イエスは極度の悲しみのゆえに、ほとんど第二の死の近くまで来ておられました。彼はすでに、私たちの受けるべき運命を経験し始めておられました。

月曜日

さかづき
杯——自発的服従

12月1日

問2 ゲッセマネでのイエスの祈りを読んでください（マタ 26：39～42、マコ 14：35、36、ルカ 22：40～44）。祈りの主旨は何ですか。これから直面するであろう苦難に対して、イエスはどんな態度を取っておられますか。

イエスは園の中で杯の比喻を用いておられますが、私たちがイエスの内面の思いを理解する助けとなります。杯は聖書の中で、主から受ける祝福や（詩編 16：5、23：5）救い（116：13）を表すために用いられています。しかし、それ以上に、杯は罪と罪人に対する神の裁きに関して用いられています（詩編 75：9、口語訳 75：8）。この杯は神の敵に対する怒りの酒、つまり裁判官としての神の怒りが含まれています（エレ 25：15、16）。できることなら、この杯を過ぎ去らせてくださいと、イエスが父なる神に祈られたときの杯はこの杯のことでした（マタ 26：39、マコ 14：36）。イエスは弟子たちから、また特に神から見捨てられるという孤独を経験しておられました。彼は弟子たちの同伴と支えを求められましたが、かないませんでした。そこで今、イエスはたった一人で父なる神に、自分を見捨てないでくださいと祈られたのでした。しかし、神の沈黙という闇の中から返ってきた答えは、「人類を救うためには、ほかに方法はない」というものでした。イエスは父なる神の御心に黙って従われます。

問3 暴徒たちがイエスを捕らえるためにやって来たとき、ペトロはイエスを守ろうとします。ペトロに対するイエスの言葉（ヨハ 18：11）は、イエスが喜んで私たちのために苦難を受けようとしておられたことを理解する上でどんな助けになりますか。

イエスは死ぬために世に来られました。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」（マコ 10：45）。当然ながら、神は死ぬことができません。しかし、私たちの罪とその刑罰を受け入れるために、イエスは被造物である人となりました。被造物はそれ自身のうちに命を持たないので、死ぬことができるからです。ゲッセマネで、イエスは、受ける価値のない罪人のために御自分の命をささげる用意ができていました。

ゲッセマネにおいて、そして今、十字架に至る諸事件において、イエスはかつてないほどに悪の勢力と対峙しておられました。サタンの勢力に対する戦いは想像を絶するものであって、救い主を徹底的に試すものでした。

数々の侮辱的な扱いの中で、イエスは「罪人たちの手に引き渡され」ようとしていました（マタ 26：45）。「引き渡される」（“パラディドミ”）という動詞はイエスの身に起こることを描写するために何度か用いられています。ユダがイエスを引き渡す張本人であることは文脈から明らかですが、ユダの邪悪な計略の背後には神の計画が不思議な方法で進行していました。イエスを「わたしたちの罪のために死に渡され」たのは神でした（ロマ 4：25）。しかし、ガラテヤ 2：20 やエフェソ 5：2 を見ると、キリストご自身みずから私たちのために身をささげられたことがわかります。これらの聖句は明らかに十字架上のキリストの犠牲の死をさしています。

上記の「引き渡され」という動詞は、所有権が一方から他方に移るという意味です。確かに、「神の光はイエスの視界から遠のき、イエスは闇の勢力の手に渡されつつあった」（エレン・G・ホワイト『バイブル・エコー・アンド・サインズ・オブ・ザ・タイムズ』8月1日、1892年）。今や、イエスは完全に悪の勢力の手に引き渡されようとしています。これは「闇が力を振る」うとき、つまり彼が父なる神の愛から完全に引き離されるときでした。イエスはひとりで闇の王国に入って行こうとしておられます。しかし、彼が悪を完全に打ち破られるのはまさにこの王国においてでした。キリストは人性をまとった受肉の神として、サタンの王国に勝利されました。

問4 イエスは闇の力に対する勝利をどのように描写しておられますか。
ルカ 11：20～22

ルカによれば、イエスは闇の支配に直面しておられました（ルカ 22：53）。パウロも言っています。「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです」（コロ 1：13、14）。キリストは闇の王国に入って行き、私たちの経験すべきことを経験されました。それは、私たちをサタンの力から解放するためでした（使徒 26：18）。「そして、もろもろの支配と権威の武装を解除し、キリストの勝利の列に従えて、公然とさらしものになさいました」（コロ 2：15）。

水曜日

イエスの叫び——その神秘を探る

12月3日

問5 十字架上でイエスは何と呼ばれましたか。マタイ 27：46

十字架上で、イエスは激しい苦しみを味わわれました。それは父なる神も同じでした。御子のうちにおられた「全能の神は御子と共に苦しまれた」のです（エレン・G・ホワイト『天を見上げて』223ページ）。言い換えると、『神御自身がキリストと共に十字架につかれたのであった。なぜなら、キリストは父なる神と一つであられたからである』（エレン・G・ホワイト『サインズ・オブ・ザ・タイムズ』3月26日、1894年）。イエスをして「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」（マタ 27：46）と叫ばしめた三位一体の神の苦しみはいかなるものだったのでしょうか。

十字架上で、神はそれまで一度も経験したことのない罪に対する刑罰を経験されました。「父なる神の愛と恵みが取り去られたために、御子の魂は恐るべき闇で覆われた。なぜなら、イエスは罪人の立場に立っておられたからである。……義なるお方が神の有罪宣告と怒りを受けねばならないが、それは復讐によるものではない。なぜなら、罪なき御子が罪に対する刑罰を受けるのを見て、神の御心は非常に悲しみに満たされたからであった。このような三位一体の神の分離は永遠にわたって二度とないであろう」（『SDA 聖書注解』第7巻924ページ、エレン・G・ホワイト注）。

このことは、第一に、父なる神が御子から愛を取り去られたのは、御子を愛されなかったためでなく、御子が私たちの代わりに死なれたためであることを示しています。第二に、父なる神の御心には復讐心は全くなく、神は御子と共に苦しんでおられたのです。第三に、神が私たちの罪のために支払われた真の代価は「三位一体の神の分離」でした。十字架における三位一体の神の経験を描く中で、エレン・ホワイトは父なる神、御子、聖霊の間にあった関係の内側を見せてくれています。「分離する」とは「無理に引き離す」ことで、本来一つであるべきものが引き離されたのです。

三位一体の神はキリストの犠牲を通して世の罪の責任を負い、さらにこの罪の結果を身に負われたのです。死ぬことのありえない神が、独特の方法、つまり一時的な分離によって、あるいは御子を一時的に三位一体の神から締め出すことによって、永遠の死を余すところなく経験されたのです。三位一体の神のうちに起きたこの極度の苦痛に満ちた経験は一度限りのもので、二度と起きることはありません。私たちの救いのために払われた犠牲はそれほど大きなものでした。

問6 死ぬ直前におけるイエスの経験について考えてください（ヨハ 19：28～30）。「成し遂げられた」というイエスの言葉は何を意味していますか。何が成し遂げられましたか。

敵であるサタンは、指導者と共謀してキリストの死を画策しましたが、決定的な瞬間にイエスは父なる神に自発的に御自分の命をささげられました。「イエスは……頭を垂れて息を引き取られた」（ヨハ 19：30）。この言葉は、イエスが父なる神の慈愛と善意、愛に信頼して、お休みになったことを暗示します。イエスは弟子たちに次のように言うておられました。「わたしは命を、再び受けるために、捨てる。……だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる」（ヨハ 10：17、18）。ふさわしい時が来た今、イエスはその通りに実行されました。

「成し遂げられた」とは、完全な贖いの犠牲が一度だけささげられ、それによって天と地が再び一つに結ばれたことを意味していました。各時代にわたって秘められてきた救いの計画が今、十字架における神の御子の従順な死においてあまねく宇宙に啓示されました。神によって犠牲がささげられた今、その贖いの力はイエスの十字架を唯一の救いの道として仰ぐすべての人に与えられています。したがって、旧約聖書の犠牲制度は終了しました。イエスが亡くなられた瞬間、神殿の垂れ幕は上から下まで真っ二つに裂けました（マタ 27：51、マコ 15：38）。このことは、神が愛する御子の犠牲と人格において臨在し、私たちに近づかれるようになったことを示しています。

「成し遂げられた」は勝利の叫びでした。イエスはサタンを打ち破るために来て、人性という弱さ、死との対峙の中で目的を達成されました（ヘブ 2：14）。サタンと仲間の天使たちの最終的な滅びは十字架において確定しました。

この勝利はイエスの復活において啓示され、確実なものとなりました。悪の勢力はもはや神の御子を墓の中に閉じ込めておくことができませんでした。あの輝かしい日曜日の朝、イエスの言葉が実現しました。「わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である」（ヨハ 10：18）。イエスは、「生きている者である。一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている」（黙 1：18）。

金曜日

今週のメッセージ

12月5日

「人間は罪を負う者として造られていないので、救い主が負われた罪の呪い^{のろ}の恐ろしさを知ることは決してない。神の怒りは圧倒的な力をもってイエスの上に注がれたが、この悲しみに比べられる悲しみはない。人間の性質は限られた試みと試練にしか耐えることができない。有限な人間は有限な程度しか耐えることができないので、人間の性質は持ちこたえられない。しかし、キリストの性質は苦しみに耐える大いなる能力を持っていた。なぜなら、その人性は神性の中に存在し、失われた世界の罪から生じるものに耐える能力を生み出したからである。キリストの耐えられた苦しきは、罪の性質と、神が罪のうちに留まる者たちにお与えになる報いの性質とについての観念を広げ、深め、さらに伸ばす。罪の報酬は死であるが、神の賜物は悔い改め、信じる罪人にイエス・キリストを通して与えられる永遠の命である」(『SDA 聖書注解』第5巻 1103 ページ、エレン・G・ホワイト注)。

「人類に対する神の比類のない愛」

「なぜ、イエス様は、『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』と叫ばれたのですか?」。私は牧師にそう尋ねたのを思い出します。それは、まだ聖書を読み始めて間もない頃のことでした。イエス様がこんな弱音を吐くとはとても信じられなかったのです。牧師は、「この時、全人類の罪が、イエス様に押し寄せてきたために、父なる神様が見えなくなったのです」と教えてくださいました。しかし、その時の私には、よく意味がわかりませんでした。

やがて月日が過ぎ、自分も牧師という道を歩む決心をした時のことでした。急に、えも言えぬ不安に襲われたのです。次々に自分の罪が思い出されて、「お前のような罪深い者が牧師になどなれるか」と、何かが訴えてくるのです。それはまるで、底なしの暗闇の中に落ちていくかのようでした。しかし、すぐに罪はイエス様によってすでに赦されたのだと我に返り、祈っていくうちに、心に平安がやってきました。

私はこのとき、罪の絶望的な恐ろしさが少しわかったような気がしました。全人類の罪が、その一身に押し寄せてきた時、イエス様は、まさに父なる神様から永遠に引き離されてしまうかのように感じられたのです。父なる神様とずっと一つであったイエス様にとって、それは本当に耐え難い苦しみでした。しかし、イエス様は全人類の罪を自ら一身に背負われたのです。そして、ここに私たちに対する愛があるのです。そのことをいつも覚えたいものです。

長野教会牧師 村沢秀和

— 寄稿メッセージ —



あがな

キリストによる贖いの犠牲の恵み

● 暗唱聖句 ●

「それでまた、この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことができになります」 (ヘブライ7：25、新共同訳)

「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」 (ヘブル7：25、口語訳)

今週の聖句

ローマ8：34～39、コリントI・15：16～18、
エフェソ1：3、コロサイ1：16、17、ヘブライ7：25、
ペトロI・3：21、22、ヨハネI・1：9

安息日午後

今週のテーマ

12月6日

十字架の持つ究極的な意義は天の神殿における私たちのためのキリストの執り成しの働きによって脅かされることはありません。キリストなしでは、無限の恵みの富は神の賜物として自由に私たちのものとなることがなくなります。信じる者たちはキリストの執り成しを通してあふれるばかりの十字架の贖いの力を受けます。十字架のあらゆる恵みはキリストの贖いの犠牲に対する信仰を通して思いのままに私たちに与えられています。

「地の果てのすべての人々よ わたしを仰いで、救いを得よ」(イザ45：22)。これが十字架上のキリストの死が教えているメッセージです。そして、この贖いの効力はキリストの執り成しの働きを通して私たちに与えられています。

今週は、神の救いの恵みをさらに深く理解するために、キリストの大祭司としての務めの素晴らしい恵みについて学びます。

日曜日

復活と昇天

12月7日

キリストが肉体をもって復活されたことは教理的にきわめて重要な意味を持ちます。なぜなら、そのことなしには罪の赦しも、救いも、永遠の命の希望もないからです。

問1 コリント I の 15 : 16 ~ 18 を読んでください。パウロは贖いをイエスの復活とどれほど密接に関連づけていますか。

もしその後に復活がなかったなら、キリストの死はいかなる贖いの力も、赦しの力も持たなかったでしょう。この意味で、キリストの贖いの働きは神の救いの計画の中の一つの出来事に限定されるものではありません。十字架と復活は贖いという分離できない一つの働きの中の二つの部分なのです。

問2 キリストの復活、昇天、執り成しの働きの密接な関係をどのように説明しますか。I ペト 3 : 21、22、ロマ 8 : 34 ~ 39

イエスは私たちの栄化された人性を天に携えてゆき、それによって人類に天の門を開かれました。イエスの復活と昇天は、第一に、イエスが地上における御業を完成されたことを意味しています (ヨハ 17 : 4、5、19 : 30)。第二に、キリストは復活と昇天によって、御自身の犠牲の死を信じる者たちを永遠に神と一つに結びました。宇宙のいかなる力も彼らを神から引き離すことはできません。キリストが罪という障壁を取り除かれたゆえに、神の愛は絶えず、永遠に御自分の民に注がれます。第三に、キリストの昇天はまた、悪の勢力に対するキリストの十字架における勝利が最終的なものであったことをあかしします。昇天後、キリストは神の共同統治者として王位につき、神の右に座しておられます。「天使、また権威や勢力は、キリストの支配に服しているのです」(I ペト 3 : 22 —— ヘブ 10 : 12、13 参照)。敵を服従させるまで、キリストは父なる神のもとに留まられます。それから、御自分を待つ者たちを救うために現れ (ヘブ 9 : 28)、救いの御業を完成されます (フィリ 2 : 10、11、黙 17 : 14)。

◆ キリストの復活はどんな意味で、死が人生の終着点ではないことの保証ですか。もし死が人生の終着点であると思っているなら、どんな方法によってこの最大の過ちを正すことができますか。

問3 十字架上のキリストの贖いの犠牲と天の聖所におけるキリストの執り成しとの間には、どんな関係がありますか。ヘブ7：25、Iヨハ1：9、2：1、2、4：10

キリストの死と復活は父なる神の御前におけるキリストの執り成しを可能にします。キリストの執り成しは、人間の罪と罪責が天において主の御前に無関係でないことを意味します。私たちがキリストの犠牲の死の恵みにあずかるのは、ただ私たちのためのキリストの御業を通してです。罪責と罪はなおも神の目に人間経験の一部として存続し続けます。それゆえに、父なる神の御前における私たちの仲保者（イエス）の役割が救いの計画に欠かせない要素となるのです。

聖書においては、父なる神の前におけるキリストの仲保は決してキリストの贖いの犠牲と区別されていません。キリストの犠牲は人類のためにささげられましたが、その赦しの力は聖霊の招きに応じて悔い改め、回心した人々のために効力を持ち続けます。赦しはキリストを通して神から私たちに仲介されます（エフェ4：32）。しかし、悔い改めが人間の心に与えられるのもキリストを通してです（使徒5：31）。悔い改めは、信者が回心後に犯した罪の赦しのためにも有効です。なぜなら、回心後にも、罪は私たちが悩ますからです。そのようなときには、神の御前に私たちを執り成し、赦しを与えてくださる弁護者がおられると、ヨハネは言っています（Iヨハ2：1、2）。

ヘブライ2：17が「償うため」という動詞を現在形で用いているのはたぶんそのためだと思われます。このことは、キリストの和解の働きが大祭司の務めにおいても継続していることを暗示します。キリストは十字架上ですべての人のために救いを達成されましたが、天の聖所における仲保者としてのその働きを通して、御自身を信じる者たちに十字架の恵みを適用しておられるのです。天の聖所におけるキリストの執り成しがなければ、十字架の贖いの効力と力は罪人にとって無力です。キリストの執り成しは十字架にもとづいています。この執り成しはカルバリーを補強するものではなく、神の赦しの力が持つ深い意味を開示し、キリストの犠牲の死が持つ深い意味と永続的な贖いの力を明らかにするものです。

火曜日

天の聖所におけるキリストの執り成し

12月9日

問4 次の聖句によれば、キリストは私たちの仲保者として天でどんなことをしておられますか。ヨハ16：23、24、使徒5：31、エフェ1：3、2：18、ヘブ1：2、4：16、13：20、21

もしキリストの死は復活と切り離せないとすれば、復活後のキリストの即位と執り成しも同じです。将来に向けた復活の目的は、キリストが大祭司に就任することにあります。キリストは十字架上で犠牲の御業を終え、いま天の聖所で王また祭司として働いておられます。謙遜から高揚への移行は、贖い主としてのキリストの働きの進展を示しています。このことはキリストの贖いと犠牲の死の最終的な意味に影響を与えるものではなく（ヘブ10：12）、むしろそこからさらなる恵みを啓示するものです。

キリストは即位後、直ちに執り成しの働きを開始されました。そして、この出来事は教会に直接的な影響を及ぼしました。この執り成しの働きの結果として、「地上にあつて苦勞し、戦っている人々〔キリストの弟子たち〕は『愛する御子によって』受け入れられる（エペソ1：6）。天のみ使いたちと他世界の代表者たちの前で、彼らが義とされたことが宣告される」（『各時代の希望』下巻386ページ）。キリストの弟子たちが天において義とされるとすぐに、聖霊が注がれました。イエスは、父なる神に別の弁護者を遣わしてくださるようお願いすると、弟子たちに約束されました（ヨハ14：16、17）。五旬祭の日に、ペトロは聖霊降下の意味を解釈して、キリストが御自分を信じた者たちのために執り成しの働きを開始されたことのしるしであると言っています（使徒2：33）。

幸いなことに、イエスはなおも御自分の民のために働いておられます。キリストは、「神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新くなるその時まで」必ず天にとどまられる、とペトロは言っています（使徒3：21）。実現すべき預言が実現した後で、父なる神の御前におけるキリストの働きは終わります。最終的な回復はなお将来のことですが、キリストの執り成しの働きはそれをもたらします。私たちはなおキリストの昇天と再臨のあいだの救いの歴史の中で生きています。これら二つの出来事の間、キリストの執り成しがなされ、教会の使命が完結します。

◆ 黙示録8：2～5には、天の仲保者キリストについて述べられていますが、それらは私たちのささげる祈りについてどんな希望を与えてくれますか。

問5 天の聖所におけるキリストの執り成しは自然界にどんな影響を及ぼしますか。ヨハ3：35、コロ1：16、17、ヘブ1：3

もしキリストの十字架と父なる神の御前における執り成しかなかったなら、この地球は火星のように荒廃したところとなっていたでしょう。すでに触れたように、罪は自然界に悪影響を与えたために、自然界は罪の持つ反逆的な性質を表すようになりました。それでも、神は自然界をお見捨てになりませんでした。「主はすべてのものに恵みを与え 造られたすべてのものを憐れんでくださいます」（詩編145：9）。主が地球を支えるために備えてくださる方法は、神の愛の啓示であると理解することができます。

もし神の被造物の中に直接、罪の脅威にさらされるものがあるとすれば、それはこの地球における神秘的な生命現象です。神は愛の心から、たとえ罪に汚れていても、御自分の創造された命を保護しようとされました。パウロは、「我らは神の中に生き、動き、存在する」と言っています（使徒17：28）。私たちの命が守られているのは、神とは無関係に働く機械的な法則の結果ではありません。「人間の身体組織は神の管理のもとにあるが、時計のように一度セットされたなら、自力で動くのではない。心臓は動き、脈拍も、呼吸も続くが、すべてのものは神の管理のもとにある。……鼓動の一つ一つ、呼吸の一つ一つがアダムの鼻に命の息を吹き込まれた神の靈感、すなわちつねに臨在される神、大いなる『わたしはある』という方の靈感である」（エレン・G・ホワイト『医療伝道』9ページ）。

罪人は死に値する存在ですが、その命は十字架にのみ基づく神の恵みによって保護されています。パウロとバルナバは異教徒に次のように言っています。「神は……恵みをくださり、天からの雨を降らせて実りの季節を与え、食物を施して、あなたがたの心を喜びで満たして下さっているのです」（使徒14：17）。神は、「家畜のためには牧草を茂らせ 地から糧を引き出そうと働く人間のためにさまざまな草木を生えさせられる」（詩編104：14）。これらすべては神の被造物に全く値しないものであつて、キリストによる神の愛と恵みの現れです（マタ5：45、ルカ6：35）。神の慈愛は神に仕える者たちだけに与えられるものではありません。それはすべての人に提供されています。

◆ 私たちは存在をキリストの恵みに負っています。このことがわかれば、私たちの人間関係はどのように変わりますか。

木曜日

キリストの執り成しと聖霊の働き

12月11日

恵みに含まれる動的な性質を理解するために、神学者はよく「一般的な恵み」と「聖化の恵み」について語ります。アドベンチストの見方によれば、一般的な恵みとは罪人に現される神の寛大な性質をさし、それは地上の生命を守り、人の心を悔い改めと告白、回心に導く聖霊の働きにおいて現されます。聖化の恵みとは、ふつうキリストを救い主として受け入れた人の心に見られる聖霊の働きと理解されています。十字架上のキリストの死は、いわば地球を取り巻く恵みの雰囲気醸し出しました。「神は、み子という比類なき賜物を与えて、ちょうど空気が地球のまわりを取りまいているように、恵みの雰囲気ですべての人を包み込みました。このいのちを与える空気を吸いたいと望む者は、誰でも生きることができ、キリストにある全き人となることのできるのです」(『キリストへの道』90、91 ページ)。これが一般的な恵みであって、受け入れるすべての人に与えられるものです。

問6 キリストは弟子たちに何を約束されましたか。その賜物の役割は何でしたか。ヨハ 14：16、17、16：8～11、ロマ 8：9～14

イエスは、弟子たちのもとを去った後で彼らに聖霊を遣わす、また聖霊は「罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする」と言われました(ヨハ 16：8)。これが聖化の恵みです。聖霊の役割は罪深い人間に自分の罪と罪責、神からの離別を十分に自覚させることです。同時に、聖霊は罪人を絶望的な状況から救われる唯一の方法であるキリストの十字架に向けてください。この聖霊の働きがなければ、十字架はそれ自体では効力を持たなくなります。しかし、聖霊が世界において働き、絶えず罪人をイエスに向けさせてくださるのはまさに十字架のゆえです。

恵みは逆らうことのできないものではありません。人間はそれを拒絶することができますし、多くの人がそうしています。もし恵みが強制されるものなら、それはもはや恵みとは言えません。主は御自分の被造物の自由意志を尊重されます。十字架がその最もよい証拠です。

◆ あなたはどんな点で聖霊の導きに逆らっていますか。たとえ「ささいな」ことであっても、聖霊に逆らうことが危険なのはなぜですか。

「救い主は父なる神の御前に御自分の執り成しの美点を説明し、自ら個人的な仲保者としての役目を果たすことを誓約される。御自身を私たちの仲保者と宣言することによって、救い主は御自分の功績と効力を黄金の香炉の中に置かれることを私たちに知らせようと望まれる。それらを御自分の民の真心からの祈りと共にささげるためである。とするなら、多く祈ることはいかに重要なことであろう。私たちの祈りが神の御座に昇るとき、それにキリストの義の香りが混ざっているからである。私たちの声だけが聞かれるのではない。神の耳に達する前に、それは父なる神が必ず聞いてくださるキリストの声と混ざるのである」(エレン・G・ホワイト『原稿集』第7巻166ページ)。

「しかし、天の聖所において、イエスが人間の仲保者としておられるかぎり、聖霊の抑制力が支配者と国民に及んでいるのである。それは今なお、ある程度国家の法律を支配している。このような法律がなかったならば、世界の状態は現在よりはるかに悪化していたことであろう。この世の支配者の多くは、サタンの有力な手下であるが、神もまた国家の指導者たちの中に、ご自分の代表者を持っておられる。敵はそのしもべたちを動かして、神の働きをはなはだしく阻止するような法案を提出するが、主を恐れる政治家たちは、聖天使に動かされて、このような提案に断固として反対する」(『各時代の争闘』下巻381ページ)。

「壮大な贖いの計画」

イエス・キリストの十字架の死と復活。この二つはどちらか一つが欠けても救いは達成されません。そしてこの二つは、イエスがこの地上においてになるはるか以前から、忍耐強い神の意志によりその時期が定められ、実際にイエスは私たちの身代わりとしての十字架の死を全うされ、永遠の希望となる死からの復活を成し遂げられました。これほど長期にわたる壮大な計画が、果たしてこの地上にあったでしょうか。

私たちはこの計画の全貌ぜんぼうを今見ることはできませんが、無限の神は私たちを造り、その結果を後世に伝えるようにと聖書を与えてくださいました。神は今も私たちに語りかけてくださいます。この世の終わりは確実に来るが、それは間違いなく永遠の御国へと私たちを導くための計画なのだ。キリストの十字架の死と復活同様、この計画はイエスを中心に私たちを巻き込み、今も完成に向けて確実に実行されています。

福島教会牧師 中野裕也

— 寄稿メッセージ —



キリストに結ばれる

●暗唱聖句●

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」

(コリント II・5：17、新共同訳)

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」

(コリント第 II・5：17、口語訳)

今週の聖句

ローマ 5：19、6：3～6、8：9、

コリント II・5：17、ガラテヤ 4：5～7、

安息日午後

今週のテーマ

12月13日

キリストの犠牲は私たちが救われるために必要なあらゆるものを与えてくれます。それは、救い主また主としてのキリストと一つになり、永遠に結ばれる可能性を含みます。バプテスマの儀式を通してキリストに受け入れられることは、私たちがキリストの死と復活にあずかることを意味します。キリストは私たちの身代わりになって死なれたゆえに、キリストの死は私たちの死であると、私たちは考えています。この意味で、私たちはキリストと一つになるのです。キリストと一つになることによって、私たちはキリストの犠牲の限りない恵みにあずかり、またキリスト御自身の人格においてキリストによって起こされた新しい人類の一員となるのです。

キリストとのこの結合は、私たちが聖霊の働きによってキリストの体である教会に受け入れられることにおいて体現されます。このように、キリストに受け入れられることはキリストとの個人的な交わりに入ることであり、キリストの教会の秘められた計画において互いに一つに結ばれることです。

問1 以下に記された類似点と相違点を調べ、アダムにある人間の性質とキリストにある人間の性質とを要約してください。

アダム	キリスト
1. 神の子 (ルカ 3 : 38)	神の子 (ルカ 3 : 22)
2. 不従順だった (ロマ 5 : 19)	従順だった (ロマ 5 : 19)
3. 罪をもたらした (ロマ 5 : 12)	すべての人に恵みをもたらした (ロマ 5 : 20 ~ 21)
4. 死の支配をもたらした (ロマ 5 : 17)	命の支配を可能とした (ロマ 5 : 17)
5. すべての子孫は罪人 (ロマ 5 : 19)	多くの人が正しい者とされる (ロマ 5 : 19)
6. 有罪判決をもたらした (ロマ 5 : 18)	義をもたらした (ロマ 5 : 18)
7. すべての人が死ぬようになった (Iコリ 15 : 22)	すべての人が生きるようになる (Iコリ 15 : 22)

アダムの墮落は彼自身の霊的死と神からの離別をもたらしました。アダムの子孫はみな彼と同じ状況に陥り、罪と死を克服することができなくなりました。人間は生まれながらにしてアダムに属する人類、神から離れた罪深い人類の一員です。

人間がキリストにある新しい人類の一員になるのは、ただ、新しく生まれるということによります。新しい人は肉からでなく、上から生まれます (ヨハ 3:3、5、6)。これらの人たちはキリストのうちに神の救いを見いだし、キリストを信じた人たちであって、永遠の命にあずかっています (15 節)。彼らは今や罪の支配から解放され、新しく創造された人たちです (II コリ 5 : 17)。彼らは神の子ら、天の家族の一員となりました。パウロはこのことを説明して、養子縁組みによって神の家族とされたと述べています (ガラ 4 : 5 ~ 7)。イエスはバプテスマにおいて神の子と宣言されていますが、私たちがバプテスマによる養子縁組みを通して神の子の身分にあずかるのです。養子だからと言って、私たちが子以下のものであるわけではありません。それどころか、「この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししていただきます」 (ロマ 8 : 16)。

月曜日

すべてのものを新しくする——新しい人類

12月15日

キリストの救いの御業の最終的な目標はすべてのものを新しくすることであり、こうして罪によって生じた損害を恒久的に元に戻すことです。この「新しいもの」に対する希望は旧約聖書の預言者たち、特に新しい天と新しい地の創造について語ったイザヤによって明らかにされていました（イザ65：17）。新しいものについての旧約聖書の考え方は、新約聖書において、イエスによる贖いの御業という視点から、より完全なかたちで述べられています。したがって、この「新しいもの」とは、私たちがキリストにおける希望を通して待ち望んでいるものだけでなく、クリスチャンとして今すでに経験しているものでもあるわけです。たとえば、私たちはすでにキリストとの「新しい」契約に入っています（マコ14：24）。私たちはすでに「新しい」命に生きています（ロマ6：4）。キリストが御自分の死と復活の力によって始めてくださったゆえに、新しいものがすでに到来しています。

^{あがな}贖いの働きは本質的に再創造の一つであって、その徹底的な性格のゆえに新しい天と新しい地をもたらすことになります。しかし、この再創造の働きは文字通りの新しい天と地や、私たちの古い肉体の再創造をもって始まるものではありません。むしろ、それは新しい人類の創造をもって始まります。罪の問題が主として、また直接的に人間の墮落と関係があることを思い起こしてください。この問題の解決は人間の心にある罪の支配力を根絶することから始まります。これは私たちのためのキリストの働きを通して可能となります。この新しい人類は、神と人が永久に結合しているキリストによって始められました。したがって、新しい人類とは、人間がキリストによって始められた人類に加わることです。

この新しい人類は、歴史の中に具体的なかたちで現れることのない、目に見えない、抽象的な現象ではありません。それはキリストの体としての教会の中に現れます。この新しい人類は民族的、社会的な相違によってではなく、私たちがキリストにある者とするキリストの力によって決まります。パウロによれば、神はキリストによってユダヤ人と異邦人を教会に導き入れ、「双方を御自分 [キリスト] において一人の新しい人に造り上げ」てくださいます（エフェ2：15）。この新しい「人」または人類がキリストにおいて造り上げられるというのは、すなわちキリストを通して可能となった神との一致にあずかるという意味です。

問2 人がキリストに結ばれることを、パウロはどのように描写していますか。ロマ6：3～6、Ⅱコリ5：17

人は個人的な信仰の献身なしに、自動的にキリストに結ばれるのではありません。私たちが信仰によってキリストに結ばれたことを表すのがバプテスマです。バプテスマの儀式はそれほど重要なものです。

第一に、バプテスマは、キリストの死が私たちの死であること、また私たちがキリストの復活を通して新しい被造物、新しい人類の一員となったことを示す公的な宣言です。第二に、私たちは「キリストにあつて」死んだのではなく、「バプテスマによって彼の死にあずかるもの」となったのです。第三に、「キリスト・イエスに結ばれるためにバプテスマを受けた」という表現は、パウロの理解によれば、私たちが「キリストと共に」死んだこと（ロマ6：3、8）、また「キリストと共に」生きるものとされたことを意味します（コロ2：13）。これは関係的な言葉であつて、私たちが罪に死に、新しい命にあずかるのはただキリストと結ばれることによってであり、キリストを離れては絶対にありえないことを示しています。

言い換えるなら、キリストの死の完全な恵みは、私たちが信仰によってキリストの死と復活にあずかるときにのみ私たちのものとなるということです。キリストと共に「死ぬ」とは、キリストを自分の救い主として認めることです。真の回心は、キリストを離れては罪と死に全的に従属するしかなく、私たちの絶望的な状態はイエスのもとに来ることによってのみ完全に換えられることを悟って、キリストに来ることです。

最後に、キリストの復活にあずかることは、キリストが私たちのただ一人の主となられたことを意味します。キリストの復活の力にあずかることは、罪がもはや私たちを支配することがないという意味です。パウロは言っています。「罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なおも罪の中に生きることができるでしょう」（ロマ6：2）。それでも、私たちの心から追放されたとはいえ、罪がなおも私たちを支配しようとしていることを、パウロは知っていました。「従つて、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあつてはなりません」（ロマ6：12）。これはバプテスマにおいて受けた聖霊によって可能です。信仰によってキリストの死と復活にあずかることは、私たちがキリストのものであることと同じであり、それと切り離すことはできません（ガラ3：27、29、コロ2：12）。

水曜日

「キリストに結ばれて」

12月17日

問3 次の聖句は「キリストに結ばれて」（「キリストにあつて」）という言葉の意味を理解する上でどんな助けになりますか。ロマ16：7、ガラ3：28、エフェ1：1、コロ1：28、Iテサ4：16

パウロは「キリストに結ばれて」（「キリストにあつて」）という表現をいろいろな意味に用いています。ある場合には、神がキリストによってなされる御業に言及して、その表現を用いています。「神はキリストによって（英語訳「キリストにあつて」）世を御自分と和解させ」（IIコリ5：12）。この聖句は二つの重要な思想を含んでいます。一つは、キリストが和解をもたらす唯一の神の器であること、もう一つは、和解がキリストの人格と働きのうちにあることです。その意味は、私たちがキリストと結ばれることによってのみ和解にあずかることができるということです。事実、キリストの犠牲のもたらす救いの恩恵はキリストにおいてのみ私たちのものとなります。この救いの恩恵には、恵み（エフェ1：2）、永遠の命の賜物（ロマ6：23）、聖なる生活への神の召し（フィリ3：14）、選び（エフェ1：4）、贖い（コロ1：14）、義認（ガラ2：17）、赦し（エフェ4：32）、聖化（Iコリ1：2）が含まれます。キリストにおいて、私たちはよい業のために造られ（エフェ2：10）、神に近づき（3：12）、天の王座に着き（2：6）、約束されたものを受け継ぎ（1：10、11）、勝利し（IIコリ2：14）、すべてが可能となり（フィリ4：13）、根を下ろして、造り上げられます（コロ2：7）。

「キリストに結ばれて」という言葉はまた、クリスチアンの行為のすべてがキリストに結ばれてなされることを示すものです。私たちはキリストにおいて喜び（フィリ3：1）、キリストによって誇りに思い（ロマ15：17）、キリストによってしっかりと立ち（フィリ4：1）、キリストに依り頼み（エフェ6：10）、キリストによって信仰の業を行います（ガラ5：6）。

また「キリストに結ばれて」という言葉は、罪の最も恐ろしい結果の一つに対する対処を表しています。罪は私たちを中心から逸脱させ、悪の支配と影響力のもとに置きました。しかし、キリストは今や私たちの存在の中心となって、私たちの思いと行いのすべてを正しい方向に修正してくださいます。中心はキリストの内にあります。私たちはキリストにあつて自分自身を、また私たちのために備えられた輝かしい運命を知ることができます。私たちの行いのすべては、利己的な関心からではなく、キリストとの関係によって決定されるべきです。

問4 ローマ8：9を読み、次に下の解説を読んでください。その後で、この聖句の意味をあなたの言葉で説明してください。

聖霊とキリストの間には、非常に密接な関係があります。ローマ8：9には、注目に値するいくつかの思想が含まれています。第一に、肉にあることと霊にあることが対比されています。信者は肉のうちにはありません。つまり、彼らは墮落した性質によって支配されず、神に敵対することも、神の御心に従わないということもありません(6～8節)。彼らは霊のうちにあります。つまり、彼らは霊的に生きている者であり(10節)、神の子であり(14節)、罪によって支配されることがありません。これらの聖句は二つの相容れない生き方について描いています。一つは古い人に属する生き方であり、もう一つは新しい人、つまりキリストに結ばれた新しい人類に属する生き方です。

第二に、霊にあることはキリストに属していることを意味します。このことは、キリストに結ばれていることが霊にあることと同じ意味であることを示しています。聖霊とキリストは同じではありませんが、キリストは聖霊を通して信者に働きかけられます。キリストに結ばれることは聖霊に結ばれることです。キリストによって与えられる賜物は聖霊によっても与えられるということです。たとえば、私たちは聖霊によって義とされ、聖とされています(1コリ6：11)。私たちは、「聖霊によって与えられる義と平和と喜び」にあずかっています(ロマ14：17)。私たちは聖霊との、またキリストとの交わりに入っています(1コリ1：9、フィリ2：1)。

もう一つ重要なことは、バプテスマによってキリストに結ばれることがキリストの体である教会に結ばれることと密接な関係にあるということです。バプテスマを受けてキリストに結ばれることは同時に、「一つの霊によって……一つの体(つまり、教会)となるためにバプテスマを受け」ることです(1コリ12：13)。キリストの体としての教会という考えは信者相互の、また信者とキリストとの結びつきと相互依存を示しています。そのような関係はキリストに、また聖霊に結ばれて生きる生き方に反映されます。教会員はよく「キリストにある」人たちと言われますが、この言葉が時には、キリストのなされたことによって決定づけられた人生を生きるという意味において、単に「クリスチャンである」ことを意味する場合があることを示しています。

金曜日

今週のメッセージ

12月19日

「キリストは人類に御自分の存在の一部をお与えになった。人類をキリストに結びつけること、墮落した人類を神性と調和させることが贖いの働きである。キリストが人間の性質をとられたのは、キリストが父なる神と一つであるように、人間がキリストと一つになるためであり、神が独り子なる御子を愛するように、神が人を愛するためであり、人が神の性質にあずかり、神において完全な者となるためであった」(エレン・G・ホワイト『セレクトッド・メッセージズ』第1巻 251 ページ)。

「あなたはキリストに結ばれているか。もしあなた自身が弱く、無力で、有罪とされた罪人であることを認めないなら、あなたはキリストに結ばれていない。もし自分自身を高め、誇っているなら、結ばれていない。もしあなたのうちに一つでもよい点があるなら、それはひとえに恵み深い救い主の憐れみによるものである。あなたの生まれ、評判、富、才能、美德、信心、慈善、その他あなたのうちの、またあなたに関連したいかなるものも、あなたの魂とキリストとを結ぶきずなどはならない。キリストを信じない限り、あなたと教会とのつながり……は何の役にも立たない。キリストについて信じるだけでは十分ではない。キリストを信じなければならぬ。キリストの救いの恵みに心から信頼しなければならぬ」(エレン・G・ホワイト『教会へのあかし』第5巻 48、49 ページ)。

「キリストの体」

信じる者の交わりである教会は、神の臨在を体験できる場です。「教会はキリストの体であり」(エペソ1:23)、「自分の体がキリストの体の一部だ」(1コリント6:15)とも書かれています。しかし、「キリストは好きだけど教会は嫌い」などの声を聞くことが少なくありません。私自身神学生時代、ふてくされて安息日を寮の居間で過ごしていたことがあります。キリストの体とまで評される素敵な教会なのに、そこから距離を置こうとする理由は何でしょう。経験も踏まえて察すると、神の恵みを小さく見積もっているためではないかと思えます。想定外の大きな出来事が教会で起こると、「そこに恵みはない」と早合点してしまうのです。キリストは御体に傷を負われました。私たちを救うためです。そして時には教会も傷を受けます。きれいな事ではないそんな現実の教会を用いてさえ、人知を超えた救いがなされることを覚えないのです。

旭川・苫小牧・静内教会牧師 真田 治

— 寄稿メッセージ —



あがな

贖いと宇宙の調和

● 暗唱聖句 ●

「そのとき、わたしは^{ぎよくざ}玉座から語りかける大きな声を聞いた。『見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである』

(黙示録 21 : 3、4、新共同訳)

「また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、『見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとして下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである』 (黙示録 21 : 3、4、口語訳)

● 今週の聖句 ●

ダニエル書 8 : 13、14、コリント I・4 : 5、15 : 51 ~ 54、
ヘブライ 9 : 23、黙示録 20 : 1 ~ 4、11 ~ 15、22 : 3 ~ 6

安息日午後

今週のテーマ

12月20日

私たちのためのキリストの救いの御業が最終的な目標に到達するのは、この地球が愛と調和と安全に満ちた神の宇宙王国に再統合されるときです。主は今も、罪人をこの王国の住民となる聖なる者に造り変えておられます。主の贖いの計画には、再創造の業を通して社会と自然を造り変えることが含まれます。この再創造の業はまた、宇宙の戦いに終わりをもたらします。主だけがこの理想的な社会、すなわち神の愛と正義によって支配される社会を確立することがおできになります。神は罪深い人間のために死なせるために御子をお遣わしになりました。それは罪深い人間をいつの日か御自分の普遍的で永遠の王国に住まわせるためでした。このことが実現する前に、すべての悪が最終的に根絶される必要があります。

日曜日

普遍的な清め

12月21日

神の被造物が元の状態、つまり罪と汚れのない状態に回復されることは、贖罪日の儀式において示されていました。大祭司はこの日、1年のどの日よりも、神のそば近くに出ました。民の日ごとの清めはこの日、仕上げの段階に到達し、全宇宙が罪から清められるときを示していました。

問1 ダニエルは悪の勢力に対する神の最終的な勝利をどのように描写していますか。ダニ 8：13、14

ダニエルは贖罪日の象徴を用いて、キリストにおける神の贖いの働きの完成を描写しています。天の神殿は、神がキリストの執り成しを通して罪の問題を処理しておられるところです。この執り成しの働きは、2300「日」の終了と共に始まった罪と反逆的な罪人からの最終的な宇宙の清めを通して終わりを告げます。この清めは神の終わりの時の裁きと関連しています。ダニエル書7章において、この裁きの働きは天の万軍の前で、法廷を背景としてなされていますが（ダニ7：9、10、22）、このことは彼らの最終的な滅びが法的な根拠を持つことを示しています。

問2 旧約聖書における大祭司の執り成しの働きと裁きはキリストの執り成しにおいてどのように実現しますか。ヘブ9：23

キリストの犠牲が持つ清めの力は、レビ人の大祭司によって贖罪日に地上の聖所でなされた清めの儀式に現されていましたが、これはまた将来においても現されます。事実、キリストの執り成しの働きは天の聖所の清めにおいて最高潮に達します。これがキリストの裁きの業です。『ヘブライ人への手紙』は、天の聖所の清めに言及することによって、キリストの犠牲が持つ清めの効力を思い起こさせる一方で、それが再臨における神の忠実な民の経験において最終的に完成されることに目を向けさせています（ヘブ9：28）。この清めはまた、神の王国が確立される時（ヘブ12：28）、つまりすでに敗北しているキリストの敵（2：14）がキリストの「足台となってしまう」（10：13）ときを予期しています。この清めは、「敵対する者たちを焼き尽くす」（ヘブ10：27）執行審判をもたらし、それによってこの宇宙は罪と悪の存在から最終的に清められます。

問3 ヘブライ 9:27、28、コリント I の 15:51～54 を読んでください。ここにはどんなことが描かれていますか。それは私たちにどんな希望を与えてくれますか。

キリストにおける私たちの究極的な望みが実現するとき、第一に、人間の性質が根本的に変えられ（Iコリ 15:53）、この墮落し、損なわれた自己がもはや罪によって曲げられ、ゆがめられることのない真の自己に生まれ変わります。私たちはまた死ぬべき運命を免れます。

第二に、再臨において私たちの望みが実現するとき、私たちはあらゆる種類の悪の存在から解放されます。それは新しい様式の実在、罪の領域と永久に分離した実在をもたらします。あらゆる社会と文化を支配している罪深い社会状態から解放されるとき、私たちは神によって初めに創造された状態に回復されます。

第三に、キリスト再臨においてクリスチャンの望みが実現するとき、私たちはいつでも、妨害されることなく、目に見えるかたちで救い主に近づくことができます。クリスチャンは二度と引き離されることなく救い主のそば近くに住めるようになる時を待ち望んでいます（Iテサ 4:17）。私たちの主また贖い主のもとに永遠に住むとき、今は想像もできない次元における私たちの生活の質は豊かなものとなります。

最後に、再臨においてアドベンチストの望みが完成する時、調和のとれた社会的交わりが可能となります。それは再会と出会いの時です。死の力によって生じた愛する者たちとの離別は、救い主の再創造の力によって終わりを告げます（Iコリ 15:54～57）。個人の望みはここで、神の約束を抱いてキリストにあって眠っていた人たちの集団の望みと一つになります。こうして、私たちの和解が完成します。それは罪の存在によって脅かされることがありません。

◆ 上記の約束が私たちにとって重要な意味を持つのはなぜですか。もしそれらがなければ、私たちの信仰はどうなりますか。私たちの希望が「超俗的」、つまりこの世が与えるもの、私たちがこの世でなす善を超越したものでなければならぬのはなぜですか。

火曜日

悪の勢力と悪人を裁く

12月23日

問4 神はいつ、どのようにして、御自分に逆らう被造物の罪を処理されますか。I コリ 4：5、6：3、黙 20：1～4

罪の問題の処理はいくつかの段階を踏んで行われます。その理由は、罪の問題が複雑であること、また神が宇宙に御自分の正義を啓示することを望んでおられることにあります。第一に、聖書の中で千年期は神の正義を宇宙に啓示するために不可欠な出来事であって、それは地上と天上のあらゆるものに完全な和解をもたらします（コロ 1：20）。

千年期は、宇宙が再臨の時点においては悔い改めていない罪人、サタン、墮落天使の根絶に対してまだ準備ができていないことを示しています。神の知的被造物の一部が滅ぼされるのは、適切な時期、つまり宇宙のいやしと完全な調和の回復をもたらす時期においてでなければなりません。そうでなければ、サタンが最初にもたらした分裂よりもひどい分裂が生じる可能性があります。千年期は、大争闘に対する神の解決法が宇宙から支持される上で必要な時間を与えてくれるのです。

第二に、千年期は宇宙による反省と分析の時、つまり贖われた者たちとサタンの双方が大争闘の結果について再検討する時となります。サタンと彼の天使たちは荒廃した惑星に幽閉され、じつくりと時間をかけて自分たちの所業について考えます。彼らは一緒になって、愛に満ちた神の統治に対する反逆の結果について反省します。この内省は宇宙の和解に役立ちます。

第三に、天における反省は悪人の裁きというかたちでなされます（I コリ 6：2、3、黙 20：4）。贖われた者たちは天の法廷に加わり、神に反逆し続けた者たちの生涯について調べます。彼らはキリストと同じ司法権をもって、キリストと共に1000年間統治します。彼らは宇宙の謁見室^{えっけん}において、神が悔い改めた罪人を救うために最善を尽くされたこと、滅びる者たちが今や自らの決断に対する責任を負わねばならないことを見ます。私たちはみな、滅びる者たちに対する神の最終的な決定が正しいことを確信します。

◆ 神は悪人を最終的に滅ぼす前に、裁きの全過程を明らかにされますが、このことは神の品性についてどんなことを教えていますか。神の品性について知ることは、現状がいかにも悪くても、万事において神に信頼することの大切さについて何を教えてくれますか。

問5 聖書は宇宙における罪の問題の最終的決着をどのように描写していますか。黙 20：11～15、22：3～6

聖書の希望は全宇宙にまで及ぶもので、それは小羊の血によって達成された和解が宇宙の隅々にまで及ぶ瞬間を待望しています。これは千年期の終わり、つまり悪人が生き返り、サタンがたえず望んできた至上権を握るために神と神の民に土壇場の戦いを挑む時に起こります。それはまさに千年期の終わり、つまりすべての疑問が贖われた者たちの満足のいくように解決する時、また神の敵が自分たちの罪と反逆の記録に直面する時です。この時、天の家族が千年王国の調査で到達した結論は、悪の勢力が地上で到達した結論と一致します。神の御座の前で、サタンと彼の天使たち、失われた者たちは誤った目的のために戦っていたことを公に、自発的に認め、彼らを含むすべての人々が神の正義と愛を公に認めます。彼らはみな神の義を告白し、キリストが主であることを認め、正しいお方によって宣言された神の宣告を受け入れ（フィリ2：9～11）、自分たちが死に値する者であることを認めます。これは1000年間の裁きの中で神の民によってなされた評決です。全宇宙はついに完全な一致に到達し、悪の勢力は根絶されます。この時、神の正義と愛に関する疑いが宇宙から一掃され、すべての知的存在者が一つになって神の愛と正義をほめたたえます。

滅びる者たちに対する証拠は圧倒的です。「サタンは、自分から進んで反逆したことによって、自分が天に適しない者になったことを知る。彼は神と戦うために自分の能力を訓練してきた。彼にとっては、天の純潔と平和と調和とはこの上ない苦痛となるであろう。神のあわれみと正義に対するサタンの非難は、今こそ沈黙させられた。彼が主に浴びせようと努めてきた非難は、全部彼自身に向けられる。そして今、サタンはひれふして、自分の上にくだった判決が正しいことを認める。……大争闘のいっさいの事実が明らかになると、全宇宙は、忠誠な者も反逆者も、異口同音に、『万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります』と言明する」（『各時代の争闘』下巻456、457ページ）。

◆ コリント I の 4：5 を読んでください。どうしたら、この聖句に記されている約束に信頼することができますか。

木曜日

神の愛の勝利

12月25日

いかに熱心に天国を待望していたとしても、罪と死の世界しか知らない現在の私たちにとって、罪と死のない世界がどのようなものであるかを想像することは困難かもしれません。

問6 コリント I の 13 : 9 ~ 13 を読んでください。パウロはここで、私たちに何と言っていますか。

「この祝福された者たちの家郷に永遠に住むこと、魂と体、霊において、罪や呪いの暗い跡でなく、創造主の完全な御姿を帯びること、また各時代にわたって知恵と知識と聖潔において成長し、絶えず新たな思想の分野を開拓し、絶えず新たな驚きと新たな栄光を発見し、絶えず知識と喜びと愛が増し加わり、それでもなおあなたに無限の喜びと愛、知恵があることを知る——クリスチャンの希望が指し示している対象はこのようなものである（エレン・G・ホワイト『ヘルスフル・リビング』299 ページ）。

「すべての才能が発達し、すべての能力が増大する。知識を獲得するのに、頭脳を疲れさせたり、精力を使いきってしまったりするようなことはない。そこではどんな大きな企画も実行され、どんな遠大な抱負も達成され、どんな大望も実現される。そしてそれでもなお、越えるべき新しい高いところ、感嘆すべき新しい驚異、理解すべき新しい真理、頭と心と体の能力を呼び起こす新たな対象が現れてくる」（『各時代の争闘』下巻 466 ページ）。

このような希望だけが、「世界から世界」を巡り歩き、その多くの時間を「贖いの神秘を探る」ことに用いる人類の姿を想像することができます。「永遠にわたって、この主題は彼らの瞑想課題となる」（『SDA 聖書注解』第7巻 990 ページ、エレン・G・ホワイト注）。

贖われた者たちにとって、自分たちの救いの神秘、キリストの十字架の深い意味を探ること以上に喜びをもたらすものはありません。輝かしい贖いの主題は永遠にわたって私たちの最も深い知的、霊的能力に絶えず訴えかけ、私たちは十字架に現された神の愛をさらに深く深く理解していくことでしょう。

◆ あなたは一日にどれくらいの時間、十字架について瞑想していますか。どんな無益なことをやめれば、その時間を十字架上のイエスの御業について瞑想することに用いることができますか。

「それゆえに、キリストの十字架を高く掲げようではないか。天使たちはキリストに榮譽と栄光を帰している。彼らでさえ、神の御子の苦しみに目を向けなければ安全でないからである。天使たちが背信から守られているのは十字架の効力によってである。もし十字架がなければ、サタン^{サタン}の墮落以前の天使たちと同じ程度、彼らも悪に対して安全ではない。天使の完全性は天において失われた。人間の完全性は至福の樂園、エデンにおいて失われた。地でも天でも、安全を求める者はみな、神の小羊を眺めなければならない。救いの計画は神の正義と愛を現すものであるが、小羊の血によって贖われた者たちと同様、清い世界においても背信に対する永遠の防壁となる。私たちのただ一つの希望は、御自分を通して神に近づく人たちを完全に救うことができるお方の血に完全に信頼することである。カルバリーの十字架上のキリストの死はこの世における私たちの唯一の希望であって、来るべき世において私たちの主題となる。ああ、私たちは贖いの価値を理解していない！ もし理解しているなら、もっとそれについて語るだろうに。神が愛する御子を贈ってくださったことは、理解を超えた愛の現れであった。それは、神が御自分の律法の威厳を守り、同時に違反者を救うためにおおきくなる最大限のことであった」（エレン・G・ホワイト『サインズ・オブ・ザ・タイムズ』12月30日、1889年）。

「苦しみを通しての神との出会い」

「人間にはいかなる場合でも隠そうとする、あるいは隠された一隅はある。……人にも言えず、親にも言えず、先生にも言えず、自分だけで悩んでいる、また恥じている、そこでしか人間は神様に会うことはできない」。これは、仏文学者であり哲学者である森有正の残した言葉です。2005年10月、私は集中治療室で自分の頭にあるりんご大の血腫^{けっしゅ}をレントゲン写真で見せられながら、右半身不随となり、言語障害が残ることを知らされました。このような恐れと不安と絶望の中で、この言葉に出会いました。涙が止まりませんでした。私たちは誰にも言えない深いところで、恥ずかしい思いをしたり、秘密の問題でのたうちまわるように苦しんだりします。しかし、このような人間の魂の最も深いところで神にお会いすることができるのです。私はその苦しみのトンネルの中で祈り、再びイエス・キリストの十字架を見上げることができました。

シャローム横浜チャプレン 窪田千栄

— 寄稿メッセージ —

私の伝道活動報告

2008年4期

大人

青年 (30歳まで)

項目	週													
	1 10/4	2 10/11	3 10/18	4 10/25	5 11/1	6 11/8	7 11/15	8 11/22	9 11/29	10 12/6	11 12/13	12 12/20	13 12/27	合計
1. 文書配布数 (トラクト・チラシ・雑誌・本)														
2. 授けた聖書研究数 (安息日学校クラスも含む)														
3. 講演会、講習会、訪問伝道、 チラシ・トラクト配布、奉仕 活動などに参加した数														

◎統計上必要ですので、期末に信徒伝道会役員に必ずご提出ください。

-----切り取り線-----

2008年度 日 没 表

月/日	札 幌	仙 台	東 京	名 古 屋	大 阪	広 島	福 岡	鹿 児 島	沖 縄
10/3	5:13	5:17	5:23	5:34	5:40	5:52	6:00	6:00	6:14
10	5:01	5:06	5:13	5:24	5:30	5:42	5:51	5:52	6:07
17	4:49	4:56	5:03	5:15	5:21	5:34	5:42	5:44	6:00
24	4:38	4:48	4:55	5:07	5:13	5:26	5:34	5:36	5:54
31	4:29	4:39	4:47	4:59	5:06	5:18	5:27	5:30	5:49
11/7	4:20	4:31	4:40	4:52	4:59	5:12	5:21	5:24	5:44
14	4:12	4:26	4:35	4:47	4:53	5:07	5:16	5:19	5:41
21	4:06	4:21	4:31	4:44	4:50	5:03	5:13	5:16	5:38
28	4:02	4:18	4:29	4:42	4:48	5:01	5:11	5:15	5:37
12/5	4:00	4:16	4:28	4:40	4:47	5:00	5:10	5:14	5:37
12	4:01	4:17	4:29	4:41	4:48	5:01	5:11	5:16	5:39
19	4:02	4:20	4:31	4:44	4:51	5:04	5:14	5:19	5:42
26	4:06	4:23	4:34	4:47	4:54	5:07	5:18	5:22	5:45

2009年 第1期 研究予告

総題 聖書における預言の賜物とアドベンチストの歴史

第1課 天のコミュニケーションの方法

- 日曜日 初めに
- 月曜日 自然界において
- 火曜日 預言者を通して
- 水曜日 御言葉を通して
- 木曜日 キリストを通して

(著者) ゲルハルト・ファンデル (世界総会聖書研究所副所長)

今期の参考書

今期の副読本

● キリストの贖いと十字架

アンヘル・M・ロドリゲス著

A 5判 定価 945 円 (税込) 福音社発行

贖いとは何でしょうか。一般的には、贖いとは神との交わりを妨げるものを取り除くことです。ある意味で、贖いは和解と同じ意味ですが、それはまた償いという思想を含みます。この償いという奇抜な言葉は神と私たちとの間にあ
る障害物を取り除くという思想を描写するものです。贖いの教理は唯一の償い
の手段としてのキリストの犠牲を強調するものです。このキリストの犠牲によっ
て私たちと神とのあいだの障害物、すなわち罪が取り除かれ、私たちは神と和
解するのです。(序文から)

● 生き残る人々 エレン・G・ホワイト著

(原題「Story of Redemption」贖いの物語)

福音社発行

〈現在絶版なので、古い出版物をご覧になるか、
CD-ROM 版『エレン・G・ホワイト著作集』をご利用ください〉

● 明日への希望 エレン・G・ホワイト著

A 5判 1984 頁 定価 12,600 円 (税込) 福音社発行

〈『希望への光』をお持ちの方はそちらをお読みください〉



※お申し込みは各教会の書籍係へお願いします。

安息日学校聖書研究ガイド 「キリストの贖いと十字架」

定 価 525 円 (本体 500 円 + 税)
発 行 日 2008 年 9 月 25 日
原 作 版 発 行 セブンスデー・アドベンチスト
世界総会安息日学校・信徒伝道部

日本語版発行 教団安息日学校・信徒伝道部
〒 190-0011 立川市高松町 3-21-8



伝道計画
①モンゴル：アドベンチスト大学生の学生教団建設のため
②日本：東京に中国語教会建設のため
③台湾：ホープ・チャペルの協力による中国語テレビ伝道のため
※詳しい情報はwww.adventismission.orgをご覧ください。

教団	教会	教会員	人口
中国教団	959	353,703	1,341,715,000
日本教団	117	13,106	127,797,000
韓国教団	697	192,915	71,610,000
モンゴル教団	4	1,125	2,578,000
合計 (2007SDA年鑑)	1,777	562,824	1,543,700,000

北アジア太平洋支部

13回特別献金日
12月27日